

M・ウェーバーによるヘーゲル批判の特質とその問題点

吉田 浩

(徳島大学総合科学部)

- 一 初めに
- 二 「非合理の断絶」と流出論
- 三 ヘーゲルの概念の神秘的側面と具体的普遍概念が有する独自の意義
- 四 分析的方法の制限性の克服としての具体的普遍
- 五 実体の主体化と流出論の奇妙な適用
- 六 ヘーゲルの汎論理主義と彼における概念と現実の関係の転倒(一)
- 七 ヘーゲルの汎論理主義と彼における概念と現実の関係の転倒(二)
- 八 ヘーゲルにおける三類の方法の存在とヘーゲル論理学から学びうるもの(一)
- 九 ヘーゲルにおける三類の方法の存在とヘーゲル論理学から学びうるもの(二)
- 十 終わりに

マックス・ウェーバーが重篤の神経疾患から立ち直り、新たな創造の局面を展開するにあたり、最初に執筆した論文が「ロッシャーとクニースならびに歴史学派国民経済学の論理的諸問題」(以下「ロッシャーとクニース」)

と略記する)であった。この論文は「I ロッシャーと歴史的方法」、「II クニースと非合理性の問題」、「III クニースと非合理性の問題(続)」の三章からなり、一九〇三年から一九〇六年にわたって断続的に執筆されたものであった。

他面「ロッシャーとクニース」が断続的に執筆されている間に、ウエーバーはいま一つの方法論文「社会科学と社会政策にかかわる認識の『客観性』」(以下「客観性」論文と略記する)をも一九〇四年に発表していたのであり、ウエーバーの方法論的側面に関わる研究論文としては、こちらの方が有名である。

その上で私は、ウエーバーのこの二論文に注目をしたいのである。なぜなら、ウエーバーが神経疾患から立ち直り新たな創造の局面を展開するにあたり、それをヘーゲル論理学批判から開始していたというこの点に、私は独自に着目をするからである。

もちろん「ロッシャーとクニース」と「客観性」論文とがヘーゲル論理学批判ばかりを行っているのではないし、主としてヘーゲル批判を展開しているのでもない。ヘーゲル論理学は、ウエーバーのこれらの論文においては副次的に扱われ、批判されているにすぎないのである。というよりも、ウエーバーがヘーゲル論理学を直接に読みかつ検討していたとはどうしても思われないのであって、それを代用品ですませ、この代用品に描かれた限りでのヘーゲルを批判し、それをもってヘーゲル論理学批判と称していたのが真相であるとしたか、言いようがないのである。

ウエーバーがヘーゲル論理学研究を代用品で済ませていたということは、今ではG・オークスの『ウエーバーとリツカート』¹⁾と向井守氏の『マックス・ウエーバーの科学論』²⁾によって明らかとされているところである。そしてこの代用品こそが、ウエーバーが「リツカートの弟子で非常に天分にめぐまれている」³⁾と絶賛していたE・ラスクによる『フィヒテの観念論と歴史』⁴⁾であったのである。ヘーゲル論理学研究を代用品で済ませていたにもかかわらず、私はウエーバーの新たな創造の局面の第一歩において、彼がヘーゲル論理学と対決する一時期を持

つていたというこの事実注目したいし、また独自に着目せざるをえないのである。

ウェーバーに即して考えてみても、彼はヘーゲル批判をもつて新たな創造の局面の第一歩を踏み出さねばならなかったはずなのである。なぜならば、ウェーバーは「ロツシャーとクニース」の冒頭近くにおいて、本論文の目的の一つを次のように記していたからである。「わたしはいままで述べたところでは、それがわれわれに重要であるかぎり、さきに引用したリツカートの研究の本質的な観点にかなり忠実にしたがった、と信ずる。われわれの学科の方法論に対するこの著者の思想の有効性を検討するのが、本研究の目的の一つである」と。

「さきに引用したリツカートの研究」とは、H・リツカートの『自然科学的概念構成の限界』のことである。その上でウェーバーは「ロツシャーとクニース」において、方法論に関してはリツカートの見解に忠実に従ったとともに、そのみならず、先のリツカートの著作で呈示された観点の有効性を検討してみることも、本論文の目的の一つをなすといっているのである。

ところがこのリツカートであるが、彼の思想は一般に新カント派と称されている。カント哲学は、とりわけ彼に特有の認識不能な「物自体」はヘーゲルによって根本的に克服されたはずであるのに、ヘーゲル以降の十九世紀の後半から二十世紀の前半にかけてカント哲学が復興してきたのである。そしてこの新カント派の見地に立つリツカートの見解をウェーバーは受け入れたと明言しているのであるから、ウェーバーも方法論、認識論に関する側面においては新カント派に属する一人であったわけである。

ということとは、カント哲学を批判し克服しようとしたヘーゲル哲学と、それもヘーゲル論理学と、ウェーバーはどうしても一度は対決しておく必要があったのであり、ヘーゲルを批判的に検討しておくことは、ウェーバーにとり避けて通ることのできない途だったのである。だからこそ彼は「ロツシャーとクニース」と「客観性」の両論文においてヘーゲル批判を行ったし、それを展開せざるをえなかったのである。

以上の経緯に関しては、佐久間孝正氏が次のように論じている。「従来、ウェーバーの方法論が問われる場合

は、マルクスとの関係のみが一方的に強調されるくらいがあった。しかしこうしてみると、ヘーゲルとの関係を無視することはできないであろう。ウエーバーもまた他の先学と同じようにヘーゲルと対決の時期があったのであり、カント的思考圏に立つ限り、どうしても一度は乗り越えねばならぬ相手だったのである⁶⁾と。

それではウエーバーはヘーゲルとどのように対峙し、彼をいかに批判したのか、しかもその批判は正しかったのか否か、このことが問題となつてこざるをえないのである。私自身はウエーバーのヘーゲル批判は正鵠を射てはいなかった、はなはだ問題があるのみならず、誤謬でもあると考えるがゆえに、敢えてウエーバーのヘーゲル批判をとりあげ、それをこれから検討していこうとしているのである。またそのことが、ウエーバーとヘーゲルのためにも是非とも必要であるとも、私は考えるのである。

ウエーバーのヘーゲル批判が誤謬であることは、少し考えてみれば納得がいくであろう。ヘーゲルは良い意味でも悪い意味でも哲学上の、いな思想史上の、そして科学上の巨匠なのであつて、彼の理論を正確に理解し捉えることは、その文章の難解さと晦渋さもあいともなつて、一筋縄ではいかなないのである。自己の立場を一度は捨て去つて、虚心坦懐にヘーゲルを彼の立場になりきつて理解するということが、彼を批判するにしても、その理論を発展的に継承するにしても、大前提となつてくるのである。

ところがウエーバーは既述しておいたようにラスクの著作を通して間接的に、従つてラスクの眼を通した限りでのヘーゲルを学んでいるにすぎないのである。だからそこからは、ウエーバーに正確なヘーゲル批判を期待することはできないのであつて、それが誤謬に満ちた戯画的な批判とならねばならなかつたのは、むしろ当然のことなのである。但しその批判とはこれから考察していくが、単なる批判といったものではなくて、ヘーゲル哲学には科学的にはいかなる意義もなく、それは経験科学とは無縁な、ひたすら神秘的な形而上学にすぎないと貶価するが如き全面否定であつたのである。

そこで直ちにウエーバーのこのヘーゲル批判の特質とその問題点とを検討していくべきなのだが、その前に一

つ確認しておきたいことがある。それはマルクスについてであり、マルクスのヘーゲルに対する評価はいかなるものであつたのかということについてである。この点を把握しておくことが、マルクスとウェーバーとの関係を捉えていく上においても重要となってくるのである。

つまり各々がヘーゲルに対していかなる態度をとつたのか、このことを確認しておきたいのである。というのは、ヘーゲルに対するこの評価の差異という問題にまで遡つて、私はマルクス・ウェーバー問題を捉え直したいからである。この点では私も佐久間氏と同じ立場に立つ。佐久間氏は先に「従来、ウェーバーの方法論が問われる場合は、マルクスとの関係のみが一方的に強調されるくらいがあつた。しかしこうしてみると、ヘーゲルとの関係を見捨てることはできないであろう」と言及されていた。即ちヘーゲルに対するウェーバーとマルクスとの評価の差異の確認をぬきにしてマルクス・ウェーバー問題を論ずることは、生産的ではなく実り多くもなく、あるいは端的にいつて許されないことだと言われているのである。この主張に関する限りにおいて、私は佐久間氏に全面的に賛同するものである。

そこでヘーゲルに対するマルクスの態度だが、マルクスはその初期より後期の『資本論』にいたるまで、ヘーゲルに対して幾度となく様々に論及している。但し今のところはヘーゲルに対するマルクスの基本的態度を確認しえればそれでよいのだから、『資本論』においてマルクスがヘーゲルに言及している箇所をとりあげて、ヘーゲルに対するマルクスの評価を確認しておきたい。

マルクスは『資本論』第二版への後と書きで次のように述べている。「ヘーゲル弁証法が「事物を」神秘化する側面を、私は三十年ほど前に、それがまだ流行していた時代に批判した。ところが、私が『資本論』第一巻を仕上げようとしていたちょうどそのときに、いま教養あるドイツで牛耳をとっている、不愉快で不遜で凡庸な亜流どもが、ちょうどレッシングの時代に勇ましいモーゼス・メンデルスゾーンがスピノザを取り扱ったように、すなわち『死んだ犬』として、ヘーゲルを取り扱って得意になつていた。それゆえ私は、自分があの偉大な思想

家の弟子であることを公然と認め、また価値論にかんする章のあちらこちらで、彼の固有な表現様式に媚を呈しさえした⁷⁾(傍点、引用者。以下同じ)と。マルクスはこの引用文においてまず第一に、その青年時代にはヘーゲル哲学は世間でちやほやされていたが、そういう時代にこそ自分はヘーゲルを鋭く批判しておいたと言っているのである。実際その通りであって、初期マルクスこそヘーゲルに対して点数が最も辛く、ヘーゲルを根底的に批判していたのである。従ってマルクスがヘーゲルに対してラジカルなまでに批判的であったことは、確認しておかねばならないのである。

ところがかつて世間があれ程までにちやほやともてはやしていたヘーゲル哲学は、今では「死んだ犬」と看做されるまでにいたった。しかしヘーゲルに対する世間の態度がこのように転換してしまった時においてこそ、今度マルクスは己がヘーゲルの偉大な思想の直弟子であることを公言し、また『資本論』のいたる所において、ヘーゲルに独自の表現様式に媚を呈しさえもしたといっているのである。従ってこの主張からは、マルクスがヘーゲルを根底的なまでに批判しつつも、彼の哲学のなかに偉大な合理的核心部分が存在していることをも洞察し、それを承認していたことも確認しえるのである。この合理的部分を抽出し、それを継承・発展させたからこそ、自分はヘーゲルの直弟子であることをマルクスは認めているのである。それにしても他者に対する批判と評価とは、マルクスのようにかくありたいものだとつくづくと思う。

以上よりヘーゲルに対するマルクスの態度は根本的に批判的であると共に、そこにまた偉大な合理的核心部分が含まれていることをも確認するという、二面的評価がなされていたことを洞察しえるのである。だからこそマルクスは、『資本論』からの先の引用文に続けて次のように述べていたのである。「弁証法がヘーゲルの手のなかでこうむっている神秘化は、彼が弁証法の一般的な運動諸形態をはじめて包括的で意識的な仕方で叙述したということを決してさまたげるものではない。弁証法はヘーゲルにあってはさか立ちしている。神秘的な外皮のなかに合理的な核心を発見するためには、これをひっくり返さなければならぬ⁸⁾」と。マルクスのヘーゲル批判が、

彼を全面的に否定しざるやうなそれではなかったことを、押さえておかねばならない。この点が、ウェーバーのヘーゲル批判と根本的に異なるところであつて、ウェーバーの場合にはヘーゲル哲学の全面的否定であつた。

以上のことを確認しておいた上で、ウェーバーのヘーゲル批判の特質に立ち返りたい。その批判は二点に要約しえると私は考える。第一は「流出論」Emanatismus 批判であり、第二はヘーゲルの「汎論理主義」Panlogismus のゆえに、概念と現実との間の正確な関係が曇らされてしまったというウェーバーの批判である。私はウェーバーのヘーゲル批判はこの二点に要約しえると考えるし、またこう捉えてこそ、ウェーバーのヘーゲル批判を検討することも意義をもつてくると看做すのである。

佐久間氏はウェーバーのヘーゲル批判の要点を、私とは異なり次のようにまとめている。「では、ウェーバーのヘーゲル批判の核心はどこにあつたのだろうか。結論からいえば、それは次の二点に要約することができる。一つはヘーゲル哲学が、『汎論理主義(Panlogismus)』ないしは『流出論Emanatismus』の典型だということであり、二つは彼の論理(概念論)は弁証法という名の『形而上学』に依拠しているということである」と。

佐久間氏のように、ウェーバーのヘーゲル批判を要約してはならないと私は考える。第一にヘーゲルの「汎論理主義」、または「汎論理主義的な発展の弁証法」¹⁰ panlogischen Entwicklungsdialektik——そういうものがヘーゲルに存在しているとして——とはいつたいどういふことであるかということ、つまりそのことの中身、内容は、そう主張しているウェーバーに即して捉え直そうとしても、何も明らかとなつてはこないのである。ウェーバーが先の用語以上にはこの点については何事も言及してはいないのだから、必然的にそうならざるをえないのである。にも拘らず汎論理主義と流出論とを何の根拠も示すことなく佐久間氏が等置してしまうということは、はだ問題が残るのである。またヘーゲルの汎論理主義のゆえに概念と現実との間の関係が曇らされたというウェーバーのヘーゲル批判は、ウェーバーの真意とはかかわらず深刻な類のそれなのであつて、それだけにこの批判は、流出論とは無関係に独自に検討してみるに値するのである。

第二に佐久間氏は、ヘーゲル論理学は弁証法という名の形而上学だとウエーバーが看做していたと指摘するのだが、これがまた奇妙な主張なのである。ヘーゲル論理学に神秘的な側面があることは私も認めるし、マルクスもそう指摘していた。そうではあるがしかしながら、弁証法そのものが形而上学なのか、それとも弁証法は形而上学とは無縁だが、この合理的弁証法に、ヘーゲルによって神秘的外皮が押しつけられていたと看做すのか否か、この二類の立場のどちらを選択するかによって、ヘーゲルに対する態度が全く異なってくるのは当然のことなのである。佐久間氏のように弁証法Ⅱ形而上学と主張すると、初めから必然的に、ヘーゲルからは何もものも得るものはないということになってしまふのである。

そもそもウエーバーがヘーゲル弁証法を批判的に検討しているのかというと、彼はそのような試みをどこにいても一度として行なつてはいないのである。但し彼は「ロツシャールとクニース」で次のように言及している。「マルクスの『Das Kapital』が代表しているような形式におけるヘーゲルの弁証法についてより詳細な批判を行なおうとは、ロツシャールは試みようとしなかつた^{II}」と。それではロツシャールに代わつて、ウエーバーが『資本論』に受容されたような形式におけるヘーゲルの弁証法的一端だけでさえも批判的に吟味しているかという、彼はそのような企てをどこにおいても一度として展開してはいないのである。

ところがヘーゲルが彼の論理学において初めて意識的に定式化した弁証法は、実に多面的であつて包括的でもあり、画期的な意義を有するものだったのである。その第一巻有論の冒頭では、全ての事物は生成流転の過程にあるという弁証法が一般的に定式化されている。定有の章では、あるものは相対的恒常性を示しつつも、内部に含蓄している矛盾を原動力として、その質的対極者へと革命的に移行・転化をしていくことが示されている。また量から質への転化の法則、つまり漸次性の中断と飛躍の弁証法も論じられている。第二巻の本質論では、事物は単独では存在しえず、他のものとの相互前提関係のなかでのみ存在しているという反省の弁証法が考察されている。加えて矛盾の客観的存在が指摘され、それとの関係で、アリストテレスによって定式化された同一律、

矛盾律、排中律の諸命題も吟味されているのである。第三巻の概念論では有機的事態と発展の弁証法とが示され、それと連動して一般に普遍概念の抜本的転換が企てられているのである。また論理学全体は、事柄のなかに肯定的契機だけをみるのではなく否定的契機も洞察し、この否定的要素を原動力とする自己運動という形式によって貫かれているのである。加えて科学で普通に用いられる諸々のカテゴリーの肯定的意義とその欠陥とが示され、この欠陥を克服すべくより高次のカテゴリーが要請されてくることの必然性が論じられているのである。そして各々のカテゴリーが認識論上において有する相対的意義が明らかとされているのである。

こうした包括的で多面的なヘーゲル弁証法の一端をさえ、ウェーバーは何らの検討をも加えてはいないのである。従ってウェーバーのヘーゲル批判の要点の一つを、弁証法は形而上学だという点にみる佐久間氏の見解は、お門違いの指摘だとしか言いようがないのである。

以上に論じてきたことを要約しておく、ウェーバーには確かにヘーゲル批判が存在しているのである。その批判の要点は、第一にヘーゲル論理学は流出論だということ、第二にそれは汎論理主義であり、そのために概念と現実との関係を正確に捉えることが曇らされたということである。

この点を押さえておいた上で、ウェーバーが偉大な研究者であるという彼に対する絶大な信頼があるためか、彼のヘーゲル批判に対しては次のような肯定的見解が存在しているのである。「そこに流出論的発想や汎論理主義を指摘したことは、もともとヘーゲル哲学は『普遍性』にしても弁証法にしても、神秘性・科学性の『両面』をもっており、してみればその反面を鋭くついたものといえる¹²⁾」という。

佐久間氏が言うように、ウェーバーのヘーゲル批判がヘーゲルの神秘的側面に対してさえも、それを適切に突いたものといえるのか否か、これが問題となってくるのである。ウェーバーのヘーゲル批判が、ヘーゲルを直に検討した上でなされたものではないということには何度も言及してきた。ヘーゲルは巨匠だったのであり、こうした類の批判が、巨匠ヘーゲルの真意を深く洞察した上での適切な批判となりえるであろうか。

にも拘わらずウエーバーが学問の世界でもっている絶大な権威のために、彼の主張が一方的に信用されてそのまま受け入れられ、ヘーゲル論理学はあたかも流出論と汎論理主義によってのみ成り立っているが如き軟弱で神秘的なそれだと、ヘーゲルの真意を直に検討することもなしに、佐久間氏によって主張されてくるのである。

従ってウエーバーのヘーゲル批判ははたして正しかったのか否かを、ウエーバーの権威に屈することなく以下において検討していくことが必要となってくるのである。と同時にヘーゲルはいかなる問題に直面し、流出論という科で批判されている彼に独自の論理でもってこの問題をどのように突破しようとしていたのか、この問題をこそウエーバーのヘーゲル批判を逆手にとりつつ、私は積極的に解明していきたいのである。この問題を剔抉することは是非とも必要なのであって、ウエーバーのヘーゲル批判によって、ヘーゲル論理学が荒唐無稽な形而上学的流出論だとして闇夜に葬り去られることには、私は耐えられないのである。またこのような形でヘーゲル論理学を否定しざることは、学問的に一大損失だとも私は痛切に考えるのである。

いま一つ次のような主張もある。「神と被造物との絶対的断絶、価値と事実との完全な分断、という徹底した二分法的発想は、かつてヘーゲルが築き上げた弁証法的全体化の世界を完膚ないまでに破壊し去った。思想史上におけるウエーバーの功績は、一にかかつてここにあるとともに、これまた、ウエーバーのエートスの必然的帰結であったといえよう」¹⁸⁾がそれである。

ヘーゲル論理学は偉大な洞察に満ちあふれた哲学なのであり、それは今なお学問上の宝庫であり、これからも真剣に研究されるに値する業績だと私は考える。ところが偉大な側面をもつヘーゲル哲学とその弁証法とが、谷嶋喬四郎氏によると、たかだか二次的文献によってしかヘーゲルを研究していないウエーバーによって完膚なきまでに破壊し去られたというのである。こうまで主張されてくると、ただ事では済まされなくなってくるのである。

本当にヘーゲルがウエーバーによって完膚なきまでに破壊し去られたのであろうか、このことをウエーバーの

権威を恐れることなく徹底的に検討していかねばならなくなってくるのである。考察の要点は既述しておいた二点であって、谷嶋氏が指摘するような、神と被造物との絶対的断絶、価値と事実との完全な分断という点にあるのではない。

神と被造物との絶対的断絶を主張したのは、ウェーバーではなくプロテスタントであった。また価値と事実との完全な分断ということは、価値判断と事実判断との峻別という問題ではあっても、今の論点ではありえないのである。そもそもウェーバー自身が、谷嶋氏のあげる二類の観点からヘーゲル批判を展開していたのでは全くないのである。目下の課題は、既に確認しておいたウェーバーの二類のヘーゲル批判が妥当な批判であり、正鵠を射たそれであったのか否かというそれなのである。既述しておいた二点以外にウェーバーのヘーゲル批判の根拠を求めることは、ウェーバーがなしてもいない点にヘーゲル批判の論拠を恣意的に定めることであって、それは論点をずらすか移動させるだけの、またはウェーバーの権威の下に何でもかんでもヘーゲル批判の材料に利用しようとする無節操な試みかのいずれかではないのである。以下に章をかえて、ウェーバーのヘーゲル批判の妥当性と、逆にヘーゲルの主張の真意とを検討し、明らかとしていきたい。

- (1) Guy Oakes, *Weber and Rickett*, The MIT Press, 1988.
- (2) 向井 守、『マックス・ウェーバーの科学論』、ミネルヴァ書房、一九九七年。
- (3) Max Weber, Roscher und Knies und die logischen Probleme der historischen Nationalökonomie, in *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre* (以下GAZWLと略記する) 1968, J. C. B. Mohr. S. 16.
- (4) E. Lask, *Fichtes Idealismus und die Geschichte*.
- (5) Max Weber, a. a. O., S. 7.
- (6) 佐久間孝正、『ウェーバーとマルクス』、世界書院、一九八四年、五五頁。
- (7) Karl Marx, *Das Kapital*, in *Marx Engels Werke*, Bd. 23, Dietz Verlag, S. 27.
- (8) *Ebd.*, S. 27.

- (9) 佐久間孝正、前掲書、四五～四六頁。
- (10) Max Weber, a. a. O., S. 144.
- (11) Ebd., S. 18.
- (12) 佐久間孝正、前掲書、四九～五〇頁。
- (13) 谷嶋喬四郎、『弁証法の社会思想史的考察』、東京大学出版会、一九七二年、四四一～四四二頁。

二

ウェーバーが方法論的にはH・リツカートに依拠していたということは既述しておいた。このリツカートの見地の根本的立場を要約してウェーバーは、それにおいては一般(普遍、類)概念と特殊的、個性的現実との間には「非合理の断絶」¹⁾ hiatus irrationalis が介在すると特徴づけていた。「非合理の」という形容詞は重大な意味をもっているものであつて、それは、普遍と特殊との間に介在している「断絶」または「隙間」は、科学によつてはいかにしても克服しえないということを示していたのである。そうであるならば、一方において対象を普遍的観点から研究する普遍的科学があるということになり、リツカートとウェーバーに従うと、これが自然科学であり、理論研究だったのである。

その上でウェーバーは普遍概念を次のように規定している。「この科学に特有の理論的手段は、つねにヨリ大きくなつてゆく外延とそれゆえつねにヨリ小さくなつてゆく内包とを有する概念の使用であり、それに特有の論理的産物は、普遍的に妥当する関係概念(法則) Relationsbegriff von genereller Geltung(Gesetz)」²⁾だと。つまり自然科学的普遍概念はその妥当する範囲は広いが、逆にそれが含む内容は絶対的に貧困だとウェーバーはいつているのである。従つてこの普遍概念が、個性的現実という唯一無二の無比的事態が有している無限に豊富な内容を含蓄することは不可能であつて、だからこそ普遍と特殊とは一致することはなく、両者の間には必然的に「非合

理の断絶」が介在してくるとも主張しているのである。

それだけに他方では特殊的、個別的観点から、個性的現実がもっているその無比的な特質をこそ掴まえようとする個性化的科学も不可欠となり、それがリツカートとウェーバーに基づけば現実科学であり、具体的には歴史学、歴史的文化科学だったのである。このようにして両者においては、二類の科学の方向が不可避となってくるのである。と同時に普遍と特殊との間には非合理の断絶が介在しているのだから、この二類の科学はあい交わることは決してないということにもなってくる。つまり理論研究の非歴史化と、歴史研究の非理論化という、私の見地からすればはだはだ魅力に欠ける立場がそれである。

その上でウェーバーは、この二類の科学の分類の方向に対して「第三の可能性」³⁾ dritte Möglichkeitがあり、それが即ちヘーゲル論理学の立場だと主張してくるのである。先の二類の科学分類の原理に対立するこの「第三の可能性」とは、当然にも普遍と特殊との間のかの「非合理の断絶」を克服しようとする試みだということになる。従ってそれは、論理必然的に普遍⇌特殊と看做す立場だということになり、実際にこの観点こそがヘーゲルのとった見地だったのである。ヘーゲルは先に言及しておいたウェーバー的な普遍概念を「抽象的普遍」とよび、自己のそれを「具体的普遍」と名称して、前者から後者を鋭く区別していたのである。

即ちヘーゲルは、アリストテレス以来、一貫して維持されてきた抽象的普遍概念を彼の論理学において根本的に転換していたのである。普遍と特殊との間に断絶があると看做す立場が考えられる一つの方向だとすると、普遍⇌特殊と捉えるのも、ありうる立派な一つの途なのである。そもそもウェーバー自身が「ロツシャールとクニース」で、「論理的な研究にとつては『自明なもの』はまったくなくなひとつとして存在していない」と⁴⁾明言していたのだから、抽象的普遍に固執することなく、普遍⇌特殊と捉えても、それは何も驚くほどのことではないはずなのである。

従って検討してみなければならぬ問題は、普遍概念を転換したヘーゲルの意図は何であり、この転換により

認識の視野がいかに拡大され、従来は捉えられなかったどのような事態が把握可能となるにいたったのか、ということであるべきはずだったのである。ところがウエーバーはこのような問題は何も検討することなく、ヘーゲルの具体的普遍とは次のようなものだと一方的に解釈してくるのである。

即ちヘーゲルは、「形而上学的実在」としての「一般概念」を現実の背後に前提し、この一般概念から個別の現実を、この概念の実現としてそこから流出させてくるのであると。ここで言われている「形而上学的実在」metaphysische Realitätには注意を要する。それは、経験科学では捉えることも理解することも決してできない実在だということを意味していたのであり、要するにそれは、神秘的な神の如き存在だということなのである。

そしてこの神秘的実在こそが、いわゆるヘーゲルの「流出論」としてウエーバーによって特徴づけられる立場を構成させる根拠となるものだったのである。端的にいえば、形而上学的実在としての神秘的な「一般概念」からの流出による個別的現実の演繹ということになる。そしてこの流出論に依拠することによってヘーゲルは、普遍と特殊との間のあの「非合理の断絶」を克服しようと企図していたとウエーバーは看做すのである。

以上に私が要約しておいたことを、ウエーバーは「ロツシャールとクニース」で次のように論じている。「第三の可能性」としてのヘーゲルの立場とは、「だがそれは明らかにヘーゲルの概念論の基盤にたち、かつ概念と現実とのあいだの《非合理の断絶》をば、個別的な事物と事象とをその実現として包括しておのれから流出せしめる・形而上学的実在としての、『一般』概念によって克服しようとする試みるべきことである⁵⁾」と。

このような見解が真にヘーゲルのそれであったのか否かは今は問題としないとして、ウエーバーが描写するようなヘーゲルの見地が可能となるためには、少なくとも以下の一点が前提となっていなければならないのである。第一は、形而上学的で神秘的な実在が、現実の背後に前提的に存在しているということである。第二にその場合、全ての現実がそこから必然的に演繹されてくる最も一般的な概念とは、最も内容に富んだ概念だということである。つまり形而上学的実在としての一般概念は、また全体でもあるのである。即ち最も豊富な内容を有す

る全体が現実の背後に前提されているからこそ、全ての現実はそのから残りなく流出してくることも可能となるのであり、それから演繹されることもできるのである。

ウェーバーに即して考えてみると、このような前提がヘーゲル哲学には存在していたということになる。だからこそウェーバーは、ヘーゲル哲学をさらに次のように特徴づけていたのである。「そこでは概念の内包と外延とはその大きさが反撥し合うのではなく、一致するのである。というのは、『個別的なもの』は単に類の事例であるのみならず、概念のあらゆる部分でもあるからである。すべてのものが演繹されて出てくるような』もつとも一般的な』概念は、そこでは同時にもつとも内容に富んだ概念であるだろう」⁶⁾と。

ウェーバーが描きだすヘーゲルの流出論なるものをこのように要約しておく一方で、考察してみなければならぬ問題は、はたしてヘーゲルがこのような荒唐無稽な主張を実際に行なっていたのか否かということなのである。ヘーゲルは一面でははなはだリアリストだったのであり、だからこそ彼は『法の哲学』において適切にも次のように論じていたのである。「存在するところのものを概念において把握するのが哲学の課題である。・・・ならんらかの哲学がその現実の世界を越え出るのであると思うのは、ある個人がその時代を飛び越し、ロドス島を飛び越えて外へ出るのだと妄想するのとまったく同様におろかである。その個人の理論が実際にその時代を越え出るとすれば、そして彼が一つのあるべき世界をしつらえらるとすれば、このあるべき世界はなるほど存在してはいるけれども、たんに彼が思うことのなかにでしかない。つまりそれは、どんな好き勝手なことでも想像できる柔弱で軟弱な境域のうちには存在していない」と。

現に存在している事実、現存在している現実、これだけが哲学の対象なのであり、これを捉えることだけが科学の課題をなすとヘーゲルは明言しているのである。彼が現実を離れて、その背後か外に、神秘的な形而上学的事在を想定していたのではないということを確認することができるであろう。

その反対に、その背後であれ、その外部であれ、現実を飛び越えて何か理想的な世界像、社会のあるべき世界

像を誰かがしつらえたとしても、それは、存在することも現存することも無い世界を対象とした社会像だから、必然的に空理・空論、ユートピアとならざるをえない。だからそのような理論は、無責任にもどんな好き勝手なことでも妄想しえる柔弱で軟弱な境地ではあっても、現実を掴まえ切った、責任のある強靱な理論ではありえないとヘーゲルは主張しているのである。彼がいかにリアリストであったかもわからうというものである。

ヘーゲルはまた『小論理学』において、「哲学がとり扱うのは、現実 Wirklichkeit 以外の何ものでもない」と力強く宣言していたのである。彼が現実の背後にしろその外にしろ、現実を飛び出たり、そこから離れたりはしないと、断固として主張していることを再確認しえるであろう。彼は健全なリアリストでもあったのである。

いま一つ、ヘーゲルは『小論理学』で次のようにも論じていた。「哲学はこの同一の内容に対する、他の意識の仕方と形式の点でのみちがっているのであるから、それは現実および経験と必ず一致せねばならない。実際この一致は、或る哲学が正しいか否かにかんする少なくとも外的な試金石である」と。

この主張によって、ヘーゲルは次のことをいいたのである。『精神現象学』をも含めて考えると、認識の諸形式、諸段階には、感覺的認識、知覚的認識、そして哲学的認識とがあり、哲学的認識はさらに有論、本質論、概念論に分かれる。各々の認識段階は形式の点でのみ違うのであって、対象はそれぞれの認識形式にとって同一なのである。その上で、どの認識形式をとるかによって、対象は同一であつてもそれは全く異なつて見えてくるのだが、認識結果と対象とが一致しているということが、この認識結果が正しいか否かを判断するための、少なくとも外的な試金石をなすとヘーゲルは主張しているのである。「絶対的観念論者」を自称するヘーゲルだが、彼のこの指摘と唯物論的認識論との間には、何らの差異も見出しえないのである。この側面からも、ヘーゲルがいかにリアリストであったかを再確認しえるのである。但し、認識結果と対象との一致をもつて、その認識が正しいか否かの真の試金石ではなくて、外的なそれだとヘーゲルが看做していたことの真意は、後に明らかとする。従つて以上より、ヘーゲル哲学に関して検討してみなければならぬ問題は、彼が一般概念をもつて、現実の

背後に宿る神秘的で全体的な形而上学的実在として看做していたか否かということでは決してないのである。そうではなくて、既述しておいたことだが、かの「非合理の断絶」を克服すべく、普遍Ⅱ特殊という形で一般概念を転換させたことの積極的意義、画期的意義は何であったのかということこそ、ヘーゲルに即して考察してみることなのである。

もちろんヘーゲル哲学に神秘的な側面があることは私も認めるし、そのことは幾度となく指摘してきたし、以下の諸章でもこの点はさらに明らかとしていく。しかしながらこの神秘的側面も、ウェーバーが流出論として捉えていた文脈においてではなくて、私が以下の諸章において検討していく観点からこそ問題とすべきなのである。と同時にヘーゲル論理学の神秘的側面は是正できるのか否か、加えて彼が構築した弁証法を正しく発展させていくことは可能か否かということこそ検討していくべきなのである。ヘーゲル論理学を神秘的な流出論という科で単純に全面否定してしまつては、それから得るものは何もなくなるのである。

- (1) Max Weber, Roscher und Knies und die logischen Probleme der historischen Nationalökonomie, GAZWL, S. 15.
- (2) Ebd., S. 6.
- (3) Ebd., S. 15.
- (4) Ebd., S. 3.
- (5) Ebd., S. 15.
- (6) Ebd., S. 15.
- (7) G. W. F. Hegel, Grundlinien der Philosophie des Rechts, Felix Meiner Verlag, 1955, S. 16.
- (8) G. W. F. Hegel, Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften I, Werke in zwanzig Bänden 8, Suhrkamp Verlag, S. 48.
- (9) Ebd., S. 47.

三

ヘーゲルに、ウェーバーが指摘していたような形而上学的実在としての神秘的な「概念」が存在していることは事実なのであって、この点は否定できないのである。ヘーゲルは『小論理学』で本質論から概念論への移行の必然性を検討する際に、次のように論じていた。「因果性」の真理は「交互作用」であり、交互作用というカテゴリーの方が因果性よりも高次のそれだと看做した上で、今度はこの交互作用というカテゴリーが有する欠陥を次のように指摘してくるのである。「われわれが与えられた内容を単に交互作用の見地の下にみるにとどまるならば、それは全く没概念的な態度である。というのは、その場合われわれは単なる事実を取り扱うにすぎず、因果関係を適用する際まず問題となっている媒介の要求は、再び満足されな¹ままに残るからである」と。

ヘーゲルは次のことが言いたいのである。例えばスパルタの政体の原因を求めて、それをこの背後にあるスパルタの風習にみたとする。ところがよくよく吟味してみると、この原因であるスパルタの風習はその政体を原因としてつくりだされたものでもある。つまり両者は一方的な因果の関係にあるのではなくて、原因であったものが結果になり、結果であったものがもとの原因の原因となるという交互作用の関係にあるのである。

したがって最初には本質的なもの、原因となるものを求めて事実の背後を探求していったのに、再び単なる事実の次元に舞い戻ってしまったというのである。そしてこの意味において、また或るものを捉えるためには他のものを理解せねばならないが、この他のものを理解しようとする、最初の或るものの把握が前提となるという循環論に結局は陥るといっても、交互作用というカテゴリーは欠陥を有すると主張しているのである。

その上で、交互作用のこの欠陥は概念論の立場によってのみ解決されうると看做し、ヘーゲルは次のように指摘して概念論へと移行していくのである。「交互作用という関係の適用がなぜ不十分であるかをよく考えてみると、それは、この関係が概念に等しいものでなく、まず概念的に把握されなければならないものであるという点

にある。そしてこのことは、この相関の二つの側面を直接に与えられたものとして放置せず、前の二節で示したように、それらをより高い第三のものモメントとして認識することによって行なわれる。そしてこの第三のものこそまさに概念なのである」²⁾と。

つまり、スパルタの政体、風習とは異なる、それよりも高次の第三のものである概念によって、政体と風習との双方を包摂していかねばならず、これこそが概念論の見地だといっているのである。しかしながら世界に存在しているものは、他のものに作用を及ぼし、また他のものによって作用を受けるといふ相互前提の関係のなかにあるものだけなのである。ところがこの相互制約関係を離脱して、自分は何ものによっても制約されないが、他のものを一方的に総括するだけの第三のものたる概念といえは、このような概念はすなわち神以外の何ものでもなくなってくるのである。このような特別の意義を担わされた存在を、通常は神といふのである。と同時に、スパルタの政体ではなくその風習でもなく、それらを一方的に総括するより高次の第三のものとしての概念といわれても、この概念なるものの中身、内容は何も明らかとなってくることはないのである。

ヘーゲルが強調してやまない「概念」には、確かにこのような神秘的要素があるのである。この点は改めてウェーバーに指摘されるまでもないことであつて、十分に周知の事実なのである。だからこそマルクスも、ヘーゲルに最も点の辛かつた時代の『ヘーゲル国法論批判』において、次のようにこの「概念」を批判していたのである。「国家はその働きを国家の特性にしたがつて区分し、規定することになるのではなくて、かえつて抽象的思想の怪しげな動因であるところの概念の本性にしたがつてそうすることになるのである。したがつて体制の理性は抽象的論理なのであつて、国家概念なのではない。体制の概念のかわりに、われわれの受けとるものは概念の体制である。思想が国家の本性に則るのではなくて、かえつて国家が或る既成の思考に則る」³⁾と。

以上、ヘーゲルが強調してやまない「概念」に、神秘的な形而上学的要素が存在していることは事実なのである。しかしながら既に確認しておいたように、ヘーゲルは他面でははなはだリアリストでもあつたのであり、彼

は一面的に荒唐無稽なことだけを主張していたのではなかったのである。問題は、ウエーバーによって流出論として批判され否定された論理によって、ヘーゲルが主張したかったことは何であり、いかなる事態を捉えたかったのかということをも、批判の反面において説明しておくことなのである。

但しこの問題の考察にとりかかる前に、ウエーバーのヘーゲル批判の二、三の側面にいま少し検討を加えておきたい。そのことを行なっておくことが、ヘーゲルが「概念」ならびに「概念的把握」ということで何を意図していたかという問題の解明の糸口となると私は考えるからである。

ウエーバーは次のように主張していた。ヘーゲルにおいては「すべてのものが演繹されて出てくるような概念は、そこでは同時にもっとも内容に富んだ概念であろう」と。現実の背後に前提されている一般概念が最も内容に富んだ概念だということは、それが全体だということである。それが既にして全体だからこそ、全てのものをそこから演繹することも可能となってくるのである。

この点を以上のように確認しておいた上で、ウエーバーのこの指摘が問題となつてこざるをえないのである。この問題は、「端初」の問題と関係してくる。端初の問題とは、理論体系を展開するに際して理論は何から始めるのか、何から始めたらいのかという問題だが、この端初は、ヘーゲルでは最も内容豊かなものであり、全体だとウエーバーは指摘しているのである。ところがこの指摘が事実⁴に反するのである。

端初はヘーゲル論理学では有論であり、有論のなかでも最初に位置しているカテゴリーである「有」Sein、すなわち何が有るかではなくて、ただ有ることだけを示すカテゴリーである「有」だったのである。従つて端初は全体であり、最も内容に富んだものであるどころか、その反対なのである。即ち端初は最も抽象的であり、抽象的だから最も一面的であり、内容貧乏たる事態だったのである。この点からみても、ヘーゲルに対するウエーバーの特徴づけが全面的に誤謬であることもわかるであろう。

ヘーゲルは例証主義と批判されることを嫌つて、具体的事実に基づいて理論を説明することが極端に少ないの

だが、『哲学史講義』では、珍しく平易な事例に即して以下のように論じていた。そこでヘーゲルのこの主張を手掛かりとして彼の真意と意図とを解明し、それと対照させて、ウェーバーのヘーゲル批判の妥当性をも検討していきたい。

「変化するというのは、目に見える存在へとうつっていきながら、なお同一のままにとどまることです。もともとあったものが進行過程を支配しているのである。植物はわけもわからず変化し消滅していくものではない。胚芽のうちに変化のさきゆきはふくまれている。胚種をながめても見てとることはできないけれども、胚種は発展しようとする衝動をもつていて、いつまでも潜在状態にとどまることはたえられないのです。潜在状態にとどまりながら、それをよしとしないのが衝動ですが、それは矛盾したものです。その衝動が現実に力を発揮すると、さまざまな変化があらわれてくるが、それらはすべて胚種のうちにすでにふくまれていたものです。むしろ、発展しない状態で、かくれて観念的にふくまれているのですが、潜在的なものの顕在化が完成すると、目標があらわれます」と。

この引用文からわかることは、ヘーゲルでは端初とは、植物を例にとれば胚種なのである。胚種は、根と茎をもち、葉を繁らせ花を咲かせ実を成らすという植物全体の具体的な姿からいうと、一面的な部分であり、きわめて抽象的な一側面でしかない。ところがこの一面的な事態である胚種が、根、茎、葉、花、実をそこから発生させ展開させるという可能性を全て潜在的に、従って即自として観念的に含蓄しているのである。このことは事実である。だからこれらの可能性を現実に実現させようとして、胚種はいつまでもそこに留まらずに、根、茎、葉、花、実等々という他者へと移行していくのである。

しかしながらこの他者への移行は、最初の萌芽である胚種のなかに潜在的に含まれていた自己の可能性が顕在化して実現し、植物の全体を構成する諸契機となったものだから、胚種は他者へと移行したけれども、自己へと留まっているのである。そしてこのように、自分の内部に様々の区別をつくりだして自己を特殊化しつつ、同一

性をも維持している運動を、ヘーゲルは他者へとなりきってしまう「移行」Übergehenから区別して、特別に「発展」Entwicklungとよんでいるのである。

以上に論じてきたことから判ることを要約しておく。第一に、ヘーゲルにおける端初は一面的な存在であり、だから抽象的に実在しているものであって、ウエーバーが指摘していたような全体、それも最も具体的な内容を具備した全体といったものでは決してなかったのである。

第二にこの端初は、形而上学的実在として、現実の背後に神秘的に、加えて一方的に前提されている何ものかといったものではないのである。胚種はこの世に現実存在しており、立派に実在しているのである。

第三に、その上でこの胚種は植物の全体を構成する諸契機を自ら産出し措定していく可能性をことごとく自己のなかに潜在的に、従って観念的に含蓄しているのである。このことは、否定できない事実である。

第四に、ヘーゲルは端初または萌芽から全体としての有機的総体が完成するまでの発生過程を科学的に追うことによつて、この有機的総体がいかにして、何ゆえに、何によつて実在するにいたったのか、この定在の必然性を捉えようとしていたのである。合わせて、このことにより有機的総体性の内部構造をも掴まえようとしていたのである。

第五に、従つてヘーゲルでは、全体の体系は科学的考察の一番最後に結論として出てくるものであって、ウエーバーが指摘していたように、それが最初に前提されていたのでは決してないのである。だからこそヘーゲルは「真なるもの das Wahre は全体 das Ganze である。しかし全体とは、ただ自己展開を通じて己れを完成する実在のことに外ならない」と主張していたのである。全体となる展開過程を萌芽から追わねばならないのであって、この過程の結果として初めて全体もその姿を現し、だからこの全体の何であるかもわかってくるのである。ウエーバーが指摘していたように、初めにこの全体があるわけではないし、最初からこの全体がわかっているわけはなおさらないのである。

その上で、以上に論じてきたことを踏まえて普遍と特殊の関係に対するヘーゲルの見解をいま一度まとめておくと次のようになる。第一に、ヘーゲルでは胚種という特殊な存在、実在している特殊な一契機が普遍なのである。胚珠が植物の土台であり、植物を構成する全ての契機の展開の基礎となつているからこそ、それは普遍なのである。だから普遍は特殊なのであり、このことが普遍 \parallel 特殊と捉えるヘーゲルの見地の第一の意味なのである。

この点ではマルクスもヘーゲルと同一の立場である。彼は次のように述べていた。「だから一般なもの、一方ではただ観念上の種差であるが、それは同時に、特殊なものや個別的なもの形態とならんで、一つの特殊な現実的形態である。われわれはこの点に、いずれたちかえるであろう。これは、経済学的というより論理的な性格をもっているが、それにもかかわらずわれわれの研究の発展上大きな重要性をもつであろう。代数学のばあいでも同じである。たとえば、 a 、 b 、 c は、総じて数である。一般的に。だが次にそれらは、 a/b 、 c/b 、 c/a 、 ba 等々にたいしては、整数である」と。整数は数一般であると同時に、少数、分数等と並ぶ特殊な数でもあるというのである。

このようにヘーゲルでは、普遍とは、胚種、根、莖、葉、花、実等々の諸々の特殊に共通に見出される要素であったのではない。反対に普遍を共通の要素と看做すのがウェーバーであった。彼は次のように述べている。「ある類概念の妥当性——その範囲——が広ければ広いだけ、それは、なるだけ多くの現象のなかでの共通なものをふくむために、できるだけ抽象的なものとなり、したがって内容のとほしいものとならなくてはならないから、その概念は具体的なありかたでの現実からわれわれを遠ざけることがそれだけ多いものとなる。……われわれの文化科学においては、普遍的なものの認識は普遍的であること自体のために価値のあるものではないのである」⁸⁾と。ウェーバーが普遍を、多くの対象に共通する要素と看做していたことを端的に確認しえるであろう。

その上で、さらに普遍 \parallel 特殊ということの第二の意味が加わるのである。つまり胚種としての普遍は、そのなかに特殊としての根、莖、葉、花、実を発生させ実現させていくという可能性をことごとく内包しているのであ

る。但しあくまでも可能性としてであって、従って実在的ではなく観念的であるから、そのことを眼で見て確認することはできないけれども。

この意味で胚種は胚種に留まりえず、それはこの可能性を実現させていこうとする衝動を自分のなかに含むところの矛盾物なのである。従ってそれは自己を展開して諸々の区別を措定しつつ、これらの区別を内的契機とする有機的総体性へと自己を展開していくのである。そしてこのこと、即ち普遍が諸々の特殊を実現させる可能性をそのなかにことごとく観念的に含蓄しているということ、このことが、普遍Ⅱ特殊ということの第二の意味なのである。

その場合、胚種が諸区別を措定し、そのことによつて自己を特殊化、具体化させていくというとき、一は二となり、二は四となるといった細胞分裂のような事態が想定されるはならないのである。そうではなくて、胚種は球根という植物全体を構成する特殊な一契機としてそのまま残るのである。その上で、自己が産出していった新たな特殊的諸契機との間には、一方が他方の前提となつて他方を措定するが、反対に他方が自己の前提となつて、自己が措定もされるといふ相互前提関係が生じてくるのである。そして諸契機間の相互前提関係による各々の契機の生産と再生産の過程の全体において、これらの諸契機によつて構成されている有機的総体は自己を維持し再生産し、このようにして自己を更新していくのみならず、自己をさらにいっそう展開していくのである。

この点では、マルクスははなはだ適切に次のように述べていた。「完成したブルジョア体制においては、どんな経済的關係もブルジョアの形態での他の關係を前提し、こうしてまた、措定されたものはどれをとつても同時に前提でもあるとすれば、こうしたことは、どんな有機的体制についても見られることである。総体性としてのこうした有機的体制そのものは、自己の諸前提をもっており、総体性へのその發展は、社会のすべての要素を自己に従属させるか、それともまだ自分に欠けている器官を社会のなかからつくりだすことにほかならない。このようにしてそれは、歴史的に総体性になるのである。この総体性になるということが、その過程の、すなわち

その発展の一契機をなすのである」と。

このようにみていると、ヘーゲルには確かに神秘的な概念、一般概念が存在していたのである。この点は事実である。しかし彼はただそれだけの凡庸な研究者ではなかったのである。ヘーゲルは普遍と特殊との間のかの「非合理の断絶」を克服しようと試みていたのである。そのことよって有機性と発展という、内部に区別を含みつつも同一性をも維持している事態の把握を可能とさせることを意図していたのである。その結果として、抽象的普遍とは根本的に異なる具体的普遍という新たな普遍概念をヘーゲルは樹立するにいたったのである。ところがこうした側面に対するヘーゲルの真意を何も理解することなしに、彼を神秘的な形而上学者としてのみ戯画的に描きあげるのが、ウェーバーのヘーゲル批判であったのである。ヘーゲルの真意を理解することなくなされた批判が、たとえばヘーゲルの神秘的側面に対してだけでも、佐久間氏が主張していたように適切なヘーゲル批判といえるのであろうか。

- (1) G. W. F. Hegel, Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften I, Werke in zwanzig Bänden 8, Suhrkamp Verlag, S. 302.
- (2) Ebd., S. 302.
- (3) カール・マルクス、『ヘーゲル法哲学の批判から』、マルクス・エンゲルス全集第一巻、大月書店、二五〇頁。
- (4) Max Weber, Roscher und Knies und die logischen Probleme der historischen Nationalökonomie, GAZWL, S. 15.
- (5) G. W. F. Hegel, Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie I, Werke 18, Suhrkamp Taschenbuch Wissenschaft, SS. 40~41.
- (6) G. W. F. Hegel, Phänomenologie des Geistes, Verlag von Felix Meiner, S. 21.
- (7) Karl Marx, Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie, Dietz Verlag, 1974, SS. 353~354.
- (8) Max Weber, Die «Objektivität» sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis, GAZWL, S. 81.
- (9) Karl Marx, a. a. O., S. 189.

四

ウェーバーによつて流出論と批判された論理によつて、ヘーゲルが、現に存在している事柄をその萌芽から發生的に捉えることによつて、その定在の必然性を洞察しようとする点にその真意の一端があつたということは前章で確認した。事柄を萌芽——これをヘーゲルは概念ともよぶ——から發生的に捉えることの方法の意義はいま述べておいた点にあるのだが、しかしこれと深く関係しつつもそれとは別個の点に、つまり従来の経験科学と、それが用いる分析的方法が有する欠陥を克服しようとする点にも、その真意はあつたのである。この点では、ヘーゲルとマルクスとは全く同一の立場にあつた。

ヘーゲルは『小論理学』において、従来の経験科学の不十分さを次のように指摘している。「経験的科学の方法は次の二つの点で不十分なところを持つてゐる。その一つは、経験科学が含んでいる普遍、類等々は、それだけ取つてみると無規定で、特殊との連関を持たず、普遍的なものとは互いに外的であり偶然であるといふことであり、また結合されている諸特殊も、それ自身としては互いに外的で偶然であるといふことである。もう一つは、経験的科学は常に直接的なもの、与えられたもの、前提されたものからはじめるということである。この二つの点から言つて、経験科学の方法は必然性の形式を満足させないのである。こうした要求を満足させようとする思惟が眞の哲学的思惟であり、思弁的な思惟である」と。

このヘーゲルの主張の真意をいつそうわかりやすくするために、この主張と主旨において全く同一のそれを展開しているマルクスの見解もとりあげ、これら二つの引用文に基づいて分析的方法に対するヘーゲルの批判の主旨を捉えていきたい。「古典派経済学は、富のいろいろな固定した互いに無縁な形態を分析によつてそれらの内的な統一性に還元し、それらが無関係に並立している姿をそれから剥ぎ取ろうと試みる。「それは」現象形態の多様性からは区別された内的な関連を把握しようとする。したがつて、それは地代を超過利潤に還元し、これに

よって地代は特殊な独立な形態ではなく、その外観上の源泉たる土地から分離される。それは利子からもその独立な形態を剥ぎ取って、利子が利潤の一部分であることを示す。こうして、古典派経済学は、すべての収入形態とすべての独立な姿態を、それによって非労働者が商品の価値を分け取りする名義を、利潤という一つの形態に還元した。しかし、利潤は剰余価値に帰着する。というのは商品全体の価値が労働に帰着するからである。

商品に含まれている労働のうち支払を受けた分量は労賃に帰着し、したがって、それを越える超過分は不払労働に、種々の名義で無償で取得されるはいえ資本によってひきおこされる剰余労働に、帰着する。古典派経済学はこの分析において時折自身自身と矛盾する。それはしばしば直接に、中間項なしに還元を企て、いろいろな形態の源泉の同一性を示そうと試みる。しかし、これは古典派経済学の分析的方法から必然的に生ずることであつて、批判も理解もこの方法で始まらなければならない。古典派経済学はいろいろな形態を発生論的に展開することに関心をもたず、これらの形態を分析によってそれらの統一性に還元しようとする。というのは、与えられた前提としてのこれらの形態から出発するからである。だが、分析は発生論的叙述の、すなわち種々な段階における現実の形成過程の理解の、必然的な前提である。最後に、古典派経済学が失敗し、欠陥を示しているのは、それが資本の基本的形態を、他人の労働の取得を目的とする生産を、社会的生産の歴史的形態としてではなく、その自然形態として把握するということにあるが、しかし、古典派経済学はその分析そのものによってこのような把握の除去への道を開くのである」と。

これら二つの引用文の言わんとしている主旨が、ぴったりと一致していることには驚くのである。ヘーゲルとマルクスとは次のことが主張したかったのである。その場合、説明しやすいという便宜上の理由のために、主要にマルクスの引用文に基づいて説明していきたい。古典派経済学は、特にリカードウのそれは、利子、地代、利潤という多様な、外観的には相互に独立しており、互いに無縁にみえる収入諸形態を分析的方法によって利潤へと還元するのである。その上で利潤と労賃との背反関係をも洞察し、利潤を事実上剰余価値という一形態に還元

し、その意味で雑多な収入諸形態を統一的な基礎へと還元するのである。

その場合、これら利子、地代、利潤の背後に、剰余価値というそれらの基礎としての統一的な本質、実体を見出し発見することは、偉大な試みであり成果なのである。ところが古典派では、科学的分析の課題は、この本質の発見をもって終わってしまうのである。しかしながらそれでは、利潤、利子、地代が相互に異なった形態でなぜそこに存在しているのかということ、それぞれの定在の必然性は何も解明されてはいないのである。その限りにおいてこれらの定在は、依然として前提されたままであり、未解決の与件として放置されたままなのである。だから科学的課題という観点から考えてみると、古典派のこの発見は、もっと深い科学的任務を達成するための前提ではあっても、そこに留まり、この発見でもって満足してはならないのである。

科学的にもっと重要な課題は、剰余価値という本源の統一、内的紐帯、端初から、その転化、分裂した現象諸形態である利潤、利子、地代を發生的に捉え直すことなのである。そのことによつて、これら収入諸形態の定在の必然性と、その何であるかということとを概念的に把握することなのである。ところが本質の発見のみを任務とし、いま述べておいた点の解明が課題となつてこないというこの点にこそ、従来の経験科学が用いる分析的方法の欠陥があると、ヘーゲルとマルクスは看做しているのである。

従つて新たな課題の解明に際しては、今度は利子、地代、利潤は与えられたものとして、前提されたままであつてはならず、それらの定在の必然性こそが掴まえられねばならないのである。この観点がないことを、ヘーゲルは「経験的科学は常に直接的なもの、与えられたもの、前提されたものから始める」と述べていたのであり、マルクスも、古典派は「与えられた前提としてのこれらの形態から出発する」と論じていたのである。古典派にとつてはこれらの形態は、どこまでも所与のもの、前提されたものとして放置されたままだったのである。

ここから研究においては、叙述の仕方と探求の仕方、上向の方法と下向の方法とが区別されねばならなくなる。この点はマルクスが次のように指摘していた。「もちろん、叙述の仕方は、形式としては、探求の仕方と区別さ

れなければならぬ。探求は、素材を詳細にわがものとし、素材のさまざまな発展諸形態を分析し、それらの発展諸形態の内的紐帯をさぐり出さなければならぬ。この仕事を仕上げたのちに、はじめて、現実の運動をそれらにふさわしく叙述することができる。これが成功して、素材の生命が観念的に反映されれば、まるで（ヘーゲルにおける概念の自己展開の場合のように——引用者）ある『先験的な』構成とかわりあっているかのよう³に、思われるかもしれない」と。叙述の方法をマルクスは科学的に正しい方法とよんでいるのだが、この叙述の過程では探求の場合とは逆に、利潤、利子、地代は前提されはならず、剰余価値、またはそれを含む資本の一般概念から発生的に導きだされねばならないのである。

その上でこの叙述の過程において、普遍と特殊というカテゴリーが、独自に重要となってくるのである。見出された普遍としての剰余価値と、特殊としての利潤、利子、地代との間に、ウェーバーが指摘していた「非合理の断絶」が介在しているならば、剰余価値に基づいて利潤、利子、地代の定在の必然性を発生的に捉えていくことができなくなるのである。ところが普通の経験科学では、普遍と特殊とは、このような外的で偶然的な関係におかれていると、ヘーゲルは先の引用文で指摘していたのである。この場合にはさらに、特殊と別の特殊もこのような外的で偶然的な関係におかれることになってもいると、彼は主張してもいたのである。

この困難に直面して、この問題を解決すべく、ヘーゲルはアリストテレス以来の普遍概念を根本的に転換したのである。それが、既述しておいた二重の意味での普遍と特殊との同一としての具体的普遍だったのである。利潤、利子、地代が剰余価値という同一の原理に基づいているということは、それらがこの同一の原理によってとごとく捉えられ、全て説明されねばならず、また説明されることができはずだということでもあるのだが、そのことは、普遍概念のこの転換によって初めて可能となったのである。

以上、萌芽からの発生的展開によって事柄を捉えていくというヘーゲルの弁証法が、分析的方法の批判と、その欠陥を克服する試みを一つの根拠として生じてきたものであることを確認しえるのである。分析的方法は様々

の特殊諸形態を前提し、そこから出発して本質としての普遍を見出しはする。しかし分析はそこに留まって、出発点となったこれら諸々の特殊の定在を捉え直すこと、この形態の必然性を掴まえ直すことには無関心だったのである。かりに関心を示したとしても、抽象的普遍概念では、そのことを行なうことは不可能だったのである。

分析的方法のこの点についての無関心と欠陥については、マルクスは『資本論』でも次のようにいたる所で論及していたのである。「古典派経済学の根本的欠陥の一つは、それが、商品の分析、ことに商品価値の分析から、価値をまさに交換価値にする価値の形態をみつけ出すことに成功しなかつたことである。A・スミスやリカードウのような最良の代表者においてさえ、古典派経済学は、価値形態を、全くどうでもよいものとして、あるいは商品そのものの本性にとって外的なものとして、取り扱っている」と。古典派は、商品の分析、価値の分析から価値概念を確定することはあつても、この価値概念から価値形態を、特にその最も発展した形態である貨幣形態を捉え直すことには関心を示さなかつたのである。彼らがかりにこの点に関心を示したとしても、価値形態を価値の本性にとって外的なもの、したがつて無関係なものと看做す限りにおいて、そのことは不可能だったのである。

マルクスは次のようにも論じていた。「すでに十七世紀の最後の二、三十年間に貨幣分析の端緒はかなり進んでいて、貨幣が商品であるということが知られていたけれども、それはやはり端緒にすぎなかつた。困難は、貨幣が商品であることを理解する点にあるのではなく、どのようにして、なぜ、なにによって、商品が貨幣であるかを概念的に把握する点にある」と。古典派はここでも、分析的方法によって貨幣を商品へと還元しているだけなのである。この還元自体は正しいのだが、しかしここで留まってしまうのが、分析的方法のいつもの特徴であり、かつその制限、欠陥をなしているのである。問題はこの点を踏まえた上でさらに、商品が貨幣へと移行し発展していったことの必然性を概念的に捉えること、即ち弁証法に把握することだとマルクスはいつているのである。

萌芽からの事柄の発生史を追うことの必要性がここでも強く主張されているのである。この点をマルクスは、さらに端的に次のように指摘していた。「だれでも、ほかのことはなにも知らなくても、諸商品がそれらの使用価値の種々雑多な自然形態とはきわめていちじるしい対照をなす一つの共通の価値形態、すなわち貨幣形態をもっているということは知っている。しかし、いまここでなしとげなければならないことは、ブルジョア経済学によって決して試みられることもなかったこと、すなわち貨幣形態の発生を立証すること、すなわち、諸商品の価値関係にふくまれている価値表現の発展を、そのもつとも簡単なもつともめだたない姿態から目をくらませる貨幣形態にいたるまで追跡することである。それによって、同時に、貨幣の謎も消えうせる」と。

商品の価値表現の形態たる価値形態を、その最も簡単な萌芽形態から貨幣形態にいたるまでの発展史を押さえることによって掴まえることの必要性が、ここで特に強く主張されているのである。これもまた分析的方法の欠陥を克服しようとする一つの試みなのであって、この点に弁証法が一つの存立根拠をもっていることを理解しておかねばならないのである。この点に対するヘーゲルとマルクスとの独自の意図を何ひとつとして洞察することもなしに、発生的展開の方法を神秘的な流出論として否定してしまつては、得るものは何ひとつとしてなくなつてしまうのである。

- (1) G. W. F. Hegel, Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften I, Werke in zwanzig Bänden 8, Suhrkamp Verlag, S. 52.
- (2) カール・マルクス、『剰余価値学説史』、マルクスエンゲルス全集、二六巻のⅢ、大月書店、六四四―六四五頁。
- (3) Karl Marx, Das Kapital, Marx Engels Werke Bd 23, Dietz Verlag, S. 27.
- (4) Ebd., S. 96.
- (5) Ebd., S. 107.
- (6) Ebd., S. 62.

五

分析的方法は対象の本質を見出すことはあっても、この本質としての概念から対象の諸形態を捉え直すことには全く無関心であったということ、たとえ関心を示したとしても、そのことを実行することはできなかったということは、前章で論じておいた。この点が不可能であったのは、見出された本質が分析的方法の制限性に照応して、実体的性格に留まるそれであったからでもある。

この「実体」については、見田石介氏が次のようにその特徴を要約している。「実体は本質ではあるが、主体に対立する本質であつて、それ自ら運動し、他を産出するのではなく、またいつさいの形態をたんなる偶有性に、たんなる自己の実例にひき落とし、形態をもたぬもの、あるいは形態に外的なものである」と。本質が自己を展開して、様々の特殊的諸形態へと移行していくことのないような本質、形態に無関心な本質、実体を最も強調したスピノザに従つて表現すれば、偶有の根底に静かに横たわり続けるだけの本質、これが実体だと見田氏は捉えているのである。本質と一言でいっても、それを掴まえる次元は様々であり、本質の種々なる諸形態があるというところをも洞察しておかねばならないのである。

この点、即ち本質が自己を展開しえないそれだという点にも、古典派が自己が見出した本質から現象諸形態を捉え直すことのできなかつた弱点もあつたのである。そしてこの実体的本質の欠陥の克服の試みの結果が、普遍特殊の具体的普遍ということでもあつたのである。従つてこの具体的普遍は、自己から己れを展開して自己を様々の特殊へと分解させてそれへと移行しながらも、そのことにより自己を四分五裂に分裂させることなく、自己に留まり、自己を具体化させていくという点にその特徴があるのである。

ヘーゲルは本質のこの展開、運動という側面に重点をおいて、本質概念のこの転換を、実体 Substanzの主体 Subjekt化ともよぶのである。彼は『精神現象学』で次のように論じていた。「私の見解はただ体系そのものの叙

述によつてのみ正当化せられざるをえないものであるが、この見解によると、一切を左右する要点は、真なるものをただ単に**実体**として把握し表現するだけでなく、全く同様に**主体**としても把握し表現するということである^②と。

ここでヘーゲルが述べている「主体」というカテゴリーには、二重の意味があることを知っておかねばならない。第一に、主体とは依存的存在の反対であり、自律的事態だということである。つまり主体とは、自己の存立前提を他者において持つのではなく、それを自ら生産し再生産するような、自己再生産構造と「自己更新の原理」^③とを内包しているところの有機的総体だということである。第二にこの有機的総体性は、動いているところの**実体**であつて、自己の内部に含蓄している諸々の特殊という可能性を實現しながら、この発展という運動の展開において、自己を具体的総体性へと完成させていくような事態だということである。

この観点からマルクスが、有機的総体性の内部構造とその展開過程とをいかに特徴づけていたかということ、既に第三章で確認しておいた。全く同様に見田石介氏も、先のヘーゲルの**実体の主体化**という主張に基づいて、現実に対するマルクスの一つの新しい見方を次のように特徴づけている。「このことの根底には、資本制的生産様式の発展にたいする一つの見方があるのであつて、資本の法則をたんに均衡関係のなかにだけみ、その運動形態を単に同じ関係をくりかえすものとみ、その発展段階が何か資本にとっては与件にすぎないような外部の要因によつてひきおこされるものとみないで、資本の本性にとつては均衡とともに均衡の破壊をも法則的なものとみ、資本制的生産様式は外部からの力によつてではなくそれ自身によつて発展し、その発展諸段階を形成するとみる。したがつて新しい段階はそれのうまれた段階の否定として、それと対立的に區別されるが、同時にそれにとつて別のものでもなく、それに内包されたものの**実現**、その**具体化**とみる。あるいは別の言葉でいうと、資本の本性を、たんにその発展諸段階の根底に**共通の実体**として静かに横たわつて**いるもの**とみるのではなく、つぎつぎにそうした段階を形成してゆき、そうした形態をとつてはまたぬいで動いてゆくところの**実体**、すなわ

ち主体とみる。そういう資本制的生産様式の発展にたいする見方があるのである⁴⁾と。

普遍と特殊との第二の意味における同一性に基つき、端初としての普遍の展開による普遍の特殊化、またこの展開過程を通しての資本の諸段階の形成と、この諸段階の全体として資本主義的生産様式があるということとが、見田氏のこの見解からよくわかってくるのである。但し見田氏のこの指摘においては、次のことに注意をしておかねばならないのである。いまの引用文のなかに「資本制的生産様式の発展にたいする見方」という表現が何度かでていたように、それは「見方」であり、もっと強めていえば「世界観」なのである。世界観も広い意味での方法かもしれないけれども、しかしこの世界観を具体化するための、この世界観とは異なる狭義の方法が別に必要となってくるということに注意をしておく必要があるのである。この狭義の方法なしに、新しい観点、斬新な見方を主張したとしても、それだけでは観点だおれとなってしまうのである。この狭義の方法に関しては、私は別の箇所でも論及しておいたので、今回は割愛する。⁵⁾

以上この新しい見方のことをヘーゲルとマルクスとは、萌芽からの事柄の発生的展開の方法とか、あるいは簡単に「概念的把握」*Begreifen*とか、「実体の主体化」とよんでいたのである。そして二人は、事柄の本性としての概念をまずもって洞察することのない対象の把握のことを、「没概念的」*begrifflosig* 見地と批判してもいたのである。そして第二章から本章にわたって論じてきた点に、ウエーバーによって流出論とよばれ批判されたヘーゲルの見解と、それを発展的に継承したマルクスのそれとの真意があったのである。

ヘーゲルに対するウエーバーの流出論批判の検討を終えるに際して、ぜひとも言及しておきたいのが谷嶋喬四郎氏の『弁証法の社会思想史的考察⁶⁾』である。ここでの谷嶋氏の主張があまりに愚劣であり、流出論という用語を考案したウエーバーの学的権威を借りた、無内容であるにも拘わらずはなはだ悪質なマルクス批判であるがゆえに、誤謬に満ちている彼の見解にあえて言及しておかねばならないのである。

谷嶋氏は次のように主張している。「世界史的発展の単因的把握、社会、政治（＝支配）、経済等の現世的諸組

織形成の一元的解明がマルクスの思考の特質であるが、それはマルクスの一元的価値観に、そして何よりもその価値観を社会科学に結合せしめたことに由来する。マルクスは未来に向けて投射された理想的社會像から『現在』を断罪した」と。この引用文にある未来の「理想的社會像」に照らして、マルクスが「現在」としての資本制社會を断罪したというこの一文に注意をすることが必要なのである。この一文が、社会科学のイロハもわきまえない愚劣な主張なのである。現にある事実、現実に存在している資本制社會、これを、そしてこれだけを解明し洞察しようとするのが唯物論哲学の課題なのであって、この現に存在している事実を離れて、ありもしない未来の社會をマルクスが研究対象とするなどということはありえないことなのである。そんなことをしたら、その理論は空理・空論・ユートピアとなってしまうのである。また現実を離れて価値観をあらかじめ造っておき、この価値観に合致するように社会科学を構築するといった姑息な試みをマルクスが行なったということもありえない。そんなことを実行したら、同じようにその価値観は、事実と科学との裏付けのない一面的なイデオロギーへと墮してしまうのである。つまり觀念が現実に先行する觀念論となってしまうが、マルクスは立派な唯物論者だったのである。

以上、史的唯物論、弁証法的唯物論の見地に立脚するマルクスが、現実を離れた空想的事態へと移行するなどということとは、ありえないことなのである。従ってマルクスが、未来の理想的社會像に照らして現在としての資本制社會を全面的に断罪したということも、万が一にもありうるはずがないことなのである。

科学は事実、現実を離れてはならないというこの立場は、実はマルクス以前に、絶対的觀念論者を自称するヘーゲルこそが主張していたということとは、『法の哲学』から一文を引用して既に確認しておいた。ヘーゲルはそこで、存在するところのものを跳び越えて、ロドス島を越えて、あるべき理想像を頭のなかで一方的に造りだし、この理想像に照らして現に存在しているものを価値判断したり、断罪したりしてはならないと指摘していたのである。ヘーゲルのこの主張に鑑みても、彼を師として公言するマルクスが、谷嶋氏が主張するような、現実

性と可能性とを混同するような立場をとるはずがないのである。この問題は、既述しておいたように、社会科学のイロハに属する類のそれなのである。

谷嶋氏はその上でさらに次のようにも論じてくる。「ともあれ、社会主義社会の到来、プロレタリアの解放という一種の『本質的目的』がこの地上に流出するという『本質論』、『流出論』の立場にたっていることは明らかである。それゆえ彼ら（マルクスとエンゲルス——引用者）の方法は、形式的には帰納的であるかもしれないが、その実質は、ポパーのいう『方法論的本質論』(methodological essentialism)に他ならなかったのである」⁸⁾と。

谷嶋氏のこの主張がまた、愚劣を究めているのである。谷嶋氏がこの主張で批判の対象としているのは、マルクスの『経済学批判』の序文における次の周知の一文である。「大ざっぱにいつて、経済的社会構成が進歩してゆく段階として、アジア的、古代的、封建的、および近代ブルジョア的生産様式をあげることができる。ブルジョア的生産諸関係は、社会的生産過程の敵対的な、といっても個人的な敵対の意味ではなく、諸個人の社会的生活諸条件から生じてくる敵対という意味での敵対的な形態の最後のものである。しかし、ブルジョア社会の胎内で発展しつつある生産諸力は、同時にこの敵対関係の解決のための物質的諸条件をもつくりだす。だからこの社会構成をもって、人間社会の前史はおわりをつげるのである」⁹⁾がそれである。

谷嶋氏はマルクスのこの一文を、驚愕することに次のように解釈するのである。即ちマルクスには、世界史をアジア的、古代的、封建的、近代ブルジョア的、社会主義的と続く発展段階を経てゆくという歴史観、価値観が背景にある。その上で彼は、歴史の根底においたこの価値観、歴史観、本質論から各歴史段階を導出しているにすぎず、従って先のマルクスの主張は、彼の歴史観、価値観から発する一種のヘーゲル的な流出論だといっているのである。

しかしながら谷嶋氏のこの主張が、社会科学の、そして弁証法のイロハもわきまえない愚劣なそれなのである。ウェーバーや谷嶋氏が、ヘーゲルとマルクスとに存在していると看做す流出論とは、ヘーゲルとマルクスとにお

いては、特定の事柄をその萌芽から発生的に捉える発生的把握という見地であり、それは、分析的方法の制限性を克服するための方法でもあったということは、既に確認しておいた。従ってマルクスに関していえば、彼はこの発生的展開の方法を資本主義経済に、また商品からの貨幣の発生の過程に適用していたのである。つまり一つの事態、一つの事柄に適用しているのである。資本主義経済、封建社会、古代社会等々がそれである。マルクスはこの特定の一事態をその萌芽から、またはその本性から発生的に掴まえるようとしていただけなのである。

ところがこの特定の一事態をこえて、何か世界史全体に通用するような世界史の本性、その概念というものがあつて、そこから世界史の諸段階が流出してくるなどと、マルクスが捉えているはずがないのである。各段階のそれぞれが、その本性から発生的に理解されることはあつても、諸段階を次々に生起させるような世界史の概念、世界精神といったものは、そういうカテゴリーにしばしば言及している『歴史哲学講義』と『法の哲学』のヘーゲルにはあるかもしれないが、そんなものは唯物論者であるマルクスに存在するはずがないのである。

先の『経済学批判』の序文におけるマルクスの主張の真意は、一方では彼自身が述べていたように、これまでの世界史の諸段階を事実に基づいて概括的に総括したということである。他方では近代ブルジョア社会が、とりわけリカードウがそう看做していたように、社会の自然的な形態であり、それゆえ代替不能な絶対的形態だと掴まえるのではなくて、それは生産力を巨大に進捗させて豊かな社会のための前提を創り出すという、それに独自の存在資格をもちつつも、歴史上の一時的な相対的形態であるにすぎず、遅かれ早かれ他の社会形態にとって代わられるものだということだったのである。

以上、ウェーバーの指摘する流出論がこんな形でマルクスに対しても適用され、マルクス批判の手段に使用されているという事実を鑑み、谷嶋氏の主張に言及しておかねばならなかったのである。弁証法の研究者であることを自認しながら、ヘーゲルとマルクスの意図を何ひとつとしてまともに理解することもなく、ウェーバーの学問的権威に一方的に依拠して谷嶋氏が、ウェーバーのヘーゲル批判が「かつてヘーゲルが築きあげた弁証法的全

体化の世界を完膚ないまでに破壊し去った」などと主張しても、それは笑止千万の沙汰だとしかないようがないのである。

- (1) 見田石介、「『資本論』における実体と形態」、見田石介著作集第三卷、大月書店、二七～二八頁。
- (2) G. W. F. Hegel, *Phänomenologie des Geistes*, Verlag von Felix Meiner, S. 19.
- (3) Karl Marx, *Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie*, Dietz Verlag, S. 920.
- (4) 見田石介、『宇野理論とマルクス主義経済学』、青木書店、九～一〇頁。
- (5) 拙稿「マックス・ウェーバーの概念構成における質的性格について」(徳島大学社会科学研究所第八号、一九九五年)、「見田石介氏における分析的方法の変化について」(『唯物論と現代』、文理閣、第二五号、二〇〇〇年七月)を参照してもらいたい。
- (6) 谷嶋喬四郎、『弁証法の社会思想史的考察』、——ヘーゲル、マルクス、ウェーバー——東京大学出版会。
- (7) 同書、三五四頁。
- (8) 同書、三七七頁。
- (9) マルクス、『経済学批判』、岩波文庫、一四～一五頁。

六

ウェーバーは「ロッシヤーとクニース」において、ヘーゲル弁証法を「汎論理主義的な発展の弁証法」と特徴づけるとともに、「客観性」論文では、「ヘーゲルの汎論理主義の影響があったために、国民経済学において、概念と現実との関係をば全体としてはつきり認識することがさまたげられた」と論じてもいたのである。

このように主張しているウェーバーに即して考えてみて、彼が「汎論理主義」ということでヘーゲルにおけるいかなる事態を念頭においていたかということは、この言葉以上の言及を彼は何もしてはいないのだから、全く

明らかとはなつてこないのである。同様に、ヘーゲルの汎論理主義の悪しき影響のために、国民経済学において、概念と現実との間の関係をはっきりと認識することがどのように妨げられ、いかに曇らされたのかという問題も、ウェーバーに基づいては、これ以上に具体的に展開することはできないのである。先に紹介しておいた言明以上のことは、彼は何も言及してはいないのだから、このことは当然のことなのである。この点はウェーバー研究者にも期待できないのであつて、彼らはウェーバーが主張している範囲内のことだけを検討しているのであつて、ウェーバーの指摘を手掛かりとしてヘーゲルを直に吟味するという試みは、何ら行なつてはいないのである。しかしながら、にも拘わらず私は、ウェーバーのこの指摘自体には、彼の見解が何であつたのかにかかわらず独自に注目したいし、また着目せざるをえないのである。なぜならば、結論先取的に指摘しておけば、論理、概念、または論理学的カテゴリーが、ヘーゲルでは生きた現実であり、通常の間人にとつての現実は、彼ではこのカテゴリーの無力な自己疎外態として看做されていたというこの点にこそ、ヘーゲルの汎論理主義と、かれの論理学における神秘的側面、即ち概念と現実との関係の転倒という事態もあると、私は考えるからである。

従つてウェーバーのこの指摘自体は実に貴重なそれであり、感謝に値する問題提起なのであつて、そこでこの有難い問題提起を踏まえて、ヘーゲルにおける汎論理主義とは何であり、この汎論理主義によつて概念と現実との関係がいかに曇らされたのかというこの二類の問題を検討していかねばならなくなるのである。このことに考察を加えることが、ヘーゲル論理学の秘密へと迫る途である。但しこの問題の解明は、既述しておいたようにウェーバーとウェーバー研究者とは全く期待できないので、私が独自に行なうしかない。課題の重要性に鑑みて、この点の検討は二章に分ける。

ヘーゲルは『小論理学』において次のように論じていた。「しかし他方、また思惟の学としての論理学は高い立場をもっている。なぜなら、思惟のみが、最高のもの、真なるものを知ることができるからである」²⁾、「対象の真の性質を知るためには、われわれはまず対象について思惟しなければならず、思惟によつてはじめて対象の真

の姿は知られるのである³⁾、「思惟によって、内容がはじめ感覚、直観、表象のうちにある有り方に、或る変化がもたらされる。したがって、対象の真の性質が意識されるのは、ただ変化を介してのみである⁴⁾」等々と。

これらの主張は当然のそれであり、こうした見解の全てを私は容認するものである。『資本論』に基づいてこれらの指摘の真意を説明しておけば、次のようになる。利潤、利子、地代の背後にそれらの本質としての剰余価値を見出すことは、思惟の分析的能力によってだけである。同様に、剰余価値の実体は、労働者階級が行なっている不払いの剰余労働だということを捉えるのも、研究者の思惟作用だけであって、事実の表面にのみ這いつくばる感覚、直観、知覚作用によつてはこのような発見はできないのである。

また剰余価値、剰余労働を発見するということは、資本制社会の表面に留まりそれに拘泥する「三位一体的範式」の見地、即ち質料的要素としての生産手段を、そのまま経済的形態規定性としての資本と看做し、質料と形式とを混同したままこの種の資本が源泉となつてそれが利潤を独自に産出すると捉える、没概念的な三位一体的範式の見方を根本的に否定して、真実の認識に到達するということでもある。このように捉えれば、「対象の真の性質が意識されるのは、ただ変化を介してのみである」というヘーゲルの先の言明の真意も理解しえるのである。彼らのこれらの見解には、合理的要素を見出すことはできても、神秘的側面は何ひとつとして存在してはいないのである。

ところがこの先においてヘーゲルは別人の如くに、実に奇妙な主張を、はなはだ神秘的なそれを、詭弁としか考えられない驚くべき論理を展開してくるのである。『小論理学』において、以下のような諸主張が見出される。

「私は先に、真理の認識こそ、精神の使命であるということが、昔からの人間の信念である、と言ったが、このことは更に、もろもろの対象、内外の自然、一般的に言えば、客観そのものが、思惟されたとおりのものであること、したがって思惟は、对象的なもの真理であるということを含んでいる⁵⁾」、「このような形而上学は、具体的な同一性に達することができないで、抽象的な同一性にとどまっていたが、しかしそのすぐれた点は、思惟

のみが存在の本質であることを意識していたことであつた」等々と。

あるいは次のようにもいわれている。「思惟は外的な事物の实体をなすとともに、また精神的なものの普遍的实体でもある。人間のあらゆる直観のうちには思惟があり、また思惟は、あらゆる表象、記憶、意志、願望等々、一般に、あらゆる精神的活動のうちにある普遍的なものであつて、これらはすべて思惟の特殊化にすぎない。思惟をこのように解するとき、それはわれわれが、われわれは直観、表象、意志等々の諸能力を持つていふという場合とは異なつたものである。あらゆる自然的なもの、および精神的なもの、の眞の普遍者と解された思惟は、これらすべてを包括するものであり、一切の根底である」と。

『大論理学』でも同様に次のように論じられている。「この点から見ると、古い形而上学は近世の思想（カント哲学のこと——引用者）よりも、思惟に関してずっとすぐれた概念をもつていた。つまり、昔の形而上学の根本前提となつてゐる考えは、事柄について、また事物において、思惟によつて認識されるもののみが、事物の眞実の眞理だということであつた。従つて事物はその直接性のままで眞なるものではなく、思惟の形式に高められ、思惟されたものとなるときにはじめて眞なるものである。それ故に昔の形而上学は思惟と思惟の諸規定とを對象に無関係のものではなくて、對象の本質をなすものとみる。いかえると、事物とその思惟とは（ドイツ語はまた両者の密接な關係を表しているが）全く一致するものであり、その内在的諸規定としての思惟と事物の眞の本質とは同一の内容だと見たのである」と。

瞠目するまでに偉大であり、画期的であり、批判的精神も旺盛であり、革命的でさえもある意義を有し、深い洞察に満ちあふれているヘーゲル論理学の、その反面に存在している神秘的であり、形而上学的であり、驚愕するまでに詭弁的でもあり、彼から決して模倣してはならない側面は、これらの引用文において一読して明らかであろう。

對象の本性、對象の眞相を捉えることができるのは、感覺や直観や表象作用としての知覚ではなくて、思惟作

用であり、それによつてのみだということは、既に確認しておいた。しかもこのことは、対象の認識に根本的な変化を及ぼすということでもあった。以上の見解に関する限りにおいて、ヘーゲルの主張を全面的に容認するのだが、しかしそのことがヘーゲルでは奇妙なことに、だから思惟が対象の本質であり、あらゆる対象の根底であり、対象の実体をなすということにもなつてくるのである。とりわけ思惟作用のための前提であり、それを用いて思惟が作用する思惟規定、即ち論理学的カテゴリーが、内外の自然を含む対象の本性をなすということに、ヘーゲルの場合はなつてくるのである。

この主張がいかに神秘的であり、名状し難いまでに詭弁的かということは、既に利用しておいた『資本論』からの事例に基づいていま一度説明しておけば、一目瞭然となるであろう。利潤、利子、地代の本質、その普遍の実体をなすのは、労働者階級の行なつている不払いの剰余労働である。そしてこのことを把握するのは思惟であり、ただ思惟作用によつてだけである。ところがヘーゲルはここで留まらないのである。彼においては、利潤、利子、地代の本質は剰余価値、剰余労働ではなくて、それを洞察する思惟であり、思惟がそれを用いて作用するところの思惟規定、つまり論理学的カテゴリーだということになつてくるのである。ヘーゲルのこの見解が、驚天動地なまでに奇妙であり、名状し難いまでに神秘的なそれであるということもわかるであろう。

以上、この点に、即ち内外の自然を含む対象の本質を思惟に、また思惟規定としての論理学的カテゴリーに求めたこの点に、ヘーゲル哲学が観念論である根拠があるのであって、彼は荒唐無稽な流出論を展開したから観念論者であるのではない。と同時に私は、ヘーゲル哲学が観念論となるこの同一の点に、ウエーバーが指摘していたヘーゲルの「汎論理主義」の内実を洞察するのである。また、論理と現実との、概念と現実との混同、それらの正しい関係を捉えることを曇らせてしまったという、ウエーバーのそれ自体としては正しい批判が生起してくる根拠も、私はヘーゲルの以上に論じてきた点に求めるのである。しかしながらヘーゲルの神秘的側面とは、この程度のもものではなかつたのであって、以下章をかえて、この側面をさらに検討していきたい。

- (1) Max Weber, Die «Objektivität» sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis, GAZWL, S. 187.
- (2) G. W. F. Hegel, Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften I, Werke in zwanzig Bänden 8, Suhrkamp Verlag, S. 70
- (3) Ebd., SS. 76~77.
- (4) Ebd., SS. 78.
- (5) Ebd., S. 79.
- (6) Ebd., S. 106.
- (7) Ebd., S. 82.
- (8) G. W. F. Hegel, Wissenschaft der Logik I, Werke 5, Suhrkamp, S. 38.

七

ヘーゲルの神秘性は、前章で確認しておいたことで尽きるといったものではないのである。彼はさらに次のように主張してくる。そしてこの点に、彼における第二の神秘的側面があるのである。「しかし実際においては、感覚的に知覚されたものは、本来非独立的で二次的なものであり、思想はこれに反して本当に独立的で一次的なものである。カントはこの意味で思想的なもの（普遍的かつ必然的なもの）を客観的と呼んだのであって、これは全く正しいのである。思想は恒久的で自分自身のうちに存立をもっているが、感覚的なものは自分自身のうちに抛りどころを持たず、無常で一時的なものであるから、感覚的なものは主観的である」と。

感覚的認識と理性的で科学的な認識とを比べてみれば、その認識結果は後者の方がはるかに確実であり、堅固であり、その意味でそれが相対的な恒久性を持つということは認める。しかしながら理性的認識の結果である思想とは、例えば資本主義経済に対する思想であり、封建社会に対する思想であり、総じて何らかの対象について

の思想であつて、対象を欠いた、対象なしの思想というものはありえないのである。またこの対象が変化もするから、古い思想はすたれ、新しい思想も生じてき、このようにして思想の世界も生成流転していくのである。

以上、思想や感覚も、それらとは異なり、それらからは独立する具体的な対象をもつというこの点においては、何ら変わることはないのである。この意味では、感覚に比して思想が本当に独立的なものであり、真に第一次的なものだということはありえないのである。ところが、驚くことにヘーゲルではそうではないのである。

ヘーゲルにおいては、思想はそれ自身のなかに自己の存立根拠をもっており、従つて思想は、他者に依存することのない自立的な存在であり、第五章で確認しておいた意味での主体的な事態なのである。だからこそ彼は、思想は恒久的に、自己を維持、存続させていくと指摘していたのである。そしてこのように、対象を離れての、または対象なしでの、思惟または思想の自立化・主体化ということ、思想をこのように捉えるということ、この立場こそが、ヘーゲルにおける第二の神秘的側面をなしているのである。

その上で、ヘーゲルにおける第三の神秘的要素がこれにつけ加わってくる。彼は認識論上のカテゴリーである思惟諸規定について、いたる所で次のように主張していたのである。「これに反して、われわれが思惟する場合には、われわれはわれわれの個人的な特殊性を放棄し、事柄そのものうちへ沈潜し、思惟をそれ自身の歩みにまかせ¹る。そしてわれわれがわれ自身のものをつけ加えるならば、われわれは正しく思惟するとは言えない²」、「それ自身生動的な思惟諸規定を、それ自身で展開させねばならない³」等々と。

つまりかれの論理学においてとり扱われ、批判的に吟味されている思惟諸規定とは、人間の頭脳が一々のカテゴリーを吟味し、その欠陥を明らかとし、それゆえこの欠陥を克服すべく、認識論上のより高いカテゴリーへと、人間の頭脳作用を通して展開されていくといったものでは決してないのである。いま一度のべておけば、諸々のカテゴリーが、認識の低い段階から高い段階のそれへと順次に展開されるのは、対象と各々のカテゴリーとを人間が対照させ、人間の頭脳がそこにカテゴリーと対象との不一致を洞察するがゆえに、より高いカテゴリーを求

めていく、従って低い思惟規定から高いそれへの展開の原動力となるものは、カテゴリーと対象との不一致であり、そのことを洞察する人間の頭脳作用であり、これらだけがカテゴリーを展開させていくための源泉である、
 というのでは決してないのである。

そうではなくて、ヘーゲルの引用文において明白に指摘されていたように、思惟諸規定、即ち論理的諸カテゴリーは、人間の頭脳作用から独立して、自分自身で自分を展開し、生命ある生きた現実の事態であるかのように、より高いカテゴリーへと、自己を発展させていつているのである。

その場合ヘーゲルは、このカテゴリーの展開について、次のようなあまりにも神秘的な主張をさえも付け加えてくるのである。「——概念の体系は一般に、このような道程の中で形成されねばならないものであり——不⁴断の、純粹な、外部から何も取り入れない行程の中で自分を完成しなければならぬものである」と。

ヘーゲルのこの主張の意味内容を明らかとするために、資本主義経済に対する理論構築の試みを事例として説明していききたい。資本主義経済という対象を研究したら、その結果は『資本論』のような理論体系、概念体系として結実するはずなのだが、ヘーゲルはこの理論体系を構築するに際して、資本主義経済という現実をつねに前提し、それを十二分に吟味し、縦横に分析していきながら、この理論体系を形成していつてはならないといっているのである。そのことを、「外部から何も取り入れない行程」という言葉は意味していたのである。ヘーゲルにとっては、研究者の外部に現実を前提し、それに依拠して理論体系を展開する立場は、現実の表象に依存した卑怯なそれなのである。

そうではなくて、資本主義経済という現実に依拠することなく資本の一般概念だけを考察し——それでは、この一般概念はいかにして獲得されるのかという深刻な問題が残るのだが——、この一般概念が生きた事態であるかのように自己展開していく過程だけを純粹に洞察し、この把握の全体において理論体系は形成されるべきだといっているのである。従ってヘーゲルでは、考察し、分析すべき対象は、どこまでも資本の一般概念であり、

その自己展開の過程だけだということになるのである。

研究すべき対象をつねに眼前に前提し、それとたえまなく格闘しながら理論を構築し展開していくのが当然の姿なのであつて、研究対象を前提してはならないというこのヘーゲルの主張は、それだけにあまりにも神秘的な見解なのである。それでは、理論研究のいきつく先もわからず、その目標も見失われてしまうという背理に陥つてしまはずなのである。この点ではマルクスはヘーゲルとは明白に異なり、次のように主張していた。「実在的な主体は、依然として頭脳の外部でその独立性をたもつて存続する。すなわち、頭脳がただ思弁的だけ、ただ理論的にだけふるまうかぎりでは。だから、理論的方法にあつてもまた、社会が、主体が、前提としてつねに表象に思いうかべられていなければならぬ」と。⁽⁵⁾

その上でヘーゲルは、カテゴリー、概念の展開の、その自己運動の源泉、その原動力を、次の点に求めてくるのである。「それら（思惟諸規定のこと——引用者）は自分で自分を吟味し、自分自身に即して自分の限界を規定し自分の欠陥を指示しなければならぬ。これは後に弁証法として特別に考察されるべき思惟活動であるから、ここではたださしあたり、弁証法は外から思惟諸規定にもたらされるものではなく、思惟諸規定そのものに内在しているものとみなされねばならないということに注意するにとどめておく」⁽⁶⁾、「概念そのものが進展するための契機となるものは、概念が自分自身の中にもつところの、先に挙げた否定的なもの（das Negative）であつて、これこそ真に弁証法的なもの（das wahrhafte Dialektische）にほかならぬ」⁽⁷⁾と。

その場合、現実のなかに矛盾が客観的に存在しており、従つて現実はこの矛盾を解決すべく、自己を変化させるといふ運動が生じてくると主張するのであれば、その指摘は十分に理解しえるのである。ところがヘーゲルでは、思惟規定のなかに矛盾があり、それゆえカテゴリーはこの矛盾を解決すべく、この矛盾を原動力として、人間の頭脳からは独立に、あたかも生きた現実の事態であるかの如くに、自分で自分を吟味しながら、自己の欠陥を克服すべく自己を運動させていくのである。つまり、カテゴリーは人間の頭脳作用から離れて、認識の低いカ

テゴリーから高いそれへと進展していこうとする前進の衝動を、そういう矛盾を、それ自体のなかにもつていて、この因果性というのである。これはあまりにも神秘的な見解である。例えば「因果性」というカテゴリーをとってみて、この因果性というカテゴリーの内部において、何と何とが客観的に矛盾しているというのであろうか。

カテゴリーの自己展開というこの神秘的見解が端的に表現されているのが、『大論理学』の次の一文なのである。ヘーゲルは論理学第一巻の有論から第二巻の本質論へと移行した際に、この本質論の冒頭近くで次のように論じていた。「だが、この運動を知識の行程と考えるとすると、この有からの出発と、この有を止揚して、媒介されたものとしての本質に達するところの進行とは、有に対して外面的で、有自身の本性とは無関係な認識の活動であるかのように見える。けれども、この行程は有自身の運動である。それで、この行程において明らかにせられたことは、有がその本性によって自己を想起（内化）し、この自己内行（Insichgehen）を通じて本質となるということである」と。

有論、すなわち事柄に対する外面的で表面的な感性的認識から、事柄の内奥へと入り込み、そこに本質を見出し、事柄を本質——現象の立体的媒介構造において捉えようとする本質論への移行は、感性的で表面的な有的認識にはあきたらず、それに満足することができない人間が試みることでなく、有論に属するカテゴリー自体の自己展開によって、この移行はなされるというのである。

カテゴリーの自己運動、思惟規定の自己展開といったことは、いかにしてもありえないことである。同様にカテゴリーが、その内部に矛盾を含蓄しているということもありえない。カテゴリーが、低いカテゴリーから高いそれへと移行していくその原動力は、既に論じておいたように、あるカテゴリーと研究対象とを比較してみても、このカテゴリーでは研究対象を十全に捉え尽くしきれないから、より高次のカテゴリーを求めていくという、人間の頭脳作用の側にこそあるのである。

以上、ヘーゲルでは思惟と、そのための手段である思惟規定と、思想とが、独立した、また生きた現実の事態

なのであって、加えてそれがまた、矛盾を原動力として自己運動し、自己を展開しているのである。そして我々にとっての現実、このカテゴリー、概念の無力な自己疎外態、カテゴリーと概念が一時的に自己を忘却して、己を外面化、客観化させたものであるにすぎないのである。端的にいつてヘーゲルでは、カテゴリー、概念と現実との間の関係が、通常の場合とは異なつてさかさまになっており、転倒しているのである。通常の場合にとつては、現実、研究対象が研究者から独立してまず存在していて、この現実を捉えるための認識手段として、またはその結果として、思惟規定、概念、概念体系はあるのである。その意味では現実がどこまでも主体であつて、カテゴリー、概念、思想は副次的であり、派生的なものなのである。ところがこの関係が、ヘーゲルでは逆転しているのである。そしてここに、ヘーゲルの神秘的側面、観念論的側面の基本があるのであつて、再び指摘しておく、ウエーバー的について、荒唐無稽な流出論を展開した点に、ヘーゲルの観念論があるのではないのである。

ヘーゲル論理学はこのような奇妙な倒錯関係に陥っているからこそマルクスは、『資本論』の第二版の後と書きにおいて、きわめて適切にもヘーゲルを次のように批判していたのである。「私の弁証法的方法は、ヘーゲルのそれとは根本的に異なつてゐるばかりでなく、それとは正反対のものである。ヘーゲルにとつては、彼が理念という名のもとに一つの自立的な主体に転化しさえした思考過程が、現実的なもの創造者であつて、現実的なものはただその外的現象をなすにすぎない。私にとつては反対に、観念的なものは、人間の頭脳のなかで置き換へられ、翻訳された物質的なものにほかならない」と。

マルクスにおいては、観念的なものとは自立的な主体的事態ではありえず、現実という、観念的なものからは独立して第一義的に存在しているものを、その意味で物質的なものを、頭脳が捉え、解明し、翻訳したその結果であつて、それ以外のものでもありえなかつたのである。

本章の最後において、次のことを述べておきたい。私は、ウエーバーが指摘していたヘーゲルの「汎論理主義」

のより深い内実を、本章において考察しておいた点においてこそ押さえるのである。またこの点もウェーバーが言及していた、ヘーゲルによって概念と現実との間の関係の正しい把握が曇らされたというこの批判も、まことにその通りだと私は認めるのである。従ってウェーバーのこれらの指摘そのものは、貴重であり、有難い問題提起だったのである。但し彼がこの問題提起を越える探求を何ひとつとして行なってはいなかったもので、この感謝に値する問題提起を受けて、私はウェーバーに代わって、それに関係する諸問題を具体的に検討していかねばならなかったのである。

- (1) G. W. F. Hegel, Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften I, Werke in zwanzig Bänden 8, Suhrkamp Verlag, S. 115.
- (2) Ebd., S. 84.
- (3) Ebd., S. 85.
- (4) G. W. F. Hegel, Wissenschaft der Logik I, Werke 5, Suhrkamp, S. 49.
- (5) Karl Marx, Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie, Dietz Verlag S. 15.
- (6) G. W. F. Hegel, Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften I, Suhrkamp Verlag, S. 114.
- (7) G. W. F. Hegel, Wissenschaft der Logik I, Werke 5, Suhrkamp, S. 51.
- (8) G. W. F. Hegel, Wissenschaft der Logik II, Werke 6, Suhrkamp, S. 13.
- (9) Karl Marx, Das Kapital, Marx Engels Werke Bd. 23, S. 27.

八

本章と次章において検討していきたい課題は、以下の二点である。第一は、ヘーゲルにおいて、ウェーバー的にいえば概念と現実との間の混乱が、マルクスの表現すれば逆立ちした事態が生じてしまったのはなぜであるかという問題である。第二は、この混乱、逆立ちが一方においてヘーゲルに否定し難く存在しているのだが、こ

の欠陥にも拘わらず他方ではヘーゲル論理学からいままなお学ぶものがあるのか否か、あるとすればそれは何であるか、という問題である。まず第一の問題から考察していく。

事柄をその萌芽から発生的に捉えて、この事柄の何であるかということのみではなく、その定在の必然性をも捉えていく発生的把握＝概念的把握という観点を、ヘーゲルが初めて意識的に主張したということは、既述しておいた。ところが実はこの発生的把握という観点を、ヘーゲルは自己の論理学に適用していたのである。そしてここに、ヘーゲル論理学における根本的な誤謬があったと私は考える。

客観的事態がその萌芽から発生的に展開し発展している、しかもこの事態は、内部に構造を有する有機的な総体性であるとして、論理学とは第一義的には、有機的総体性としてのこの構造と、発展というその運動法則とをいかにしたら捉えうるのかということ、この問題を考察する狭い意味での方法、あるいは認識の学であるべきはずなのである。つまり客観的事態の構造とその運動法則と、それを捉えるための思惟法則とは、当然ながら根本的に異なるはずなのである。即ち客観的弁証法と、それを洞察していく認識の弁証法としての主観的弁証法とは、必然的に区別されねばならないのである。

ところがヘーゲルはこの点を完全に無視して、認識の学としての論理学に、客観的事態の弁証法であるかの発生的展開の方法を、そのまま適用してしまっていたのである。但しその適用の仕方とは、最も低い認識に対応するカテゴリーから高次の認識のそれへと、思惟が順次に深まっていくという意味でのカテゴリーの自己展開という形式においてであった。そして具体的には彼は、この展開を哲学史の進展に照応させたのである。つまり哲学史とは、有機的総体性とその運動法則とに関して、それを捉える認識が順次に深化していく歴史であったと看做すことによつて。

ヘーゲルが論理学に発生的展開の方法を適用してしまつたことの帰結は種々様々な方面に及ぶが、その基本的結果は以下の二点である。第一は、ヘーゲルではカテゴリーが生きた現実と看做されることになり、従つてこの

カテゴリーが生きた事態として人間の頭脳作用からは独立して、低い認識のカテゴリーから高い認識のそれへと、自力で自己展開していくということになってしまったのである。第二はその結果、我々にとっての現実、客観は、ヘーゲルでは論理必然的に、彼にとつては生きた現実であるカテゴリーが、一時的に自己を忘却した、カテゴリーの無力な自己疎外態と看做されることともなったのである。現実が二つも三つもあるはずがないのだから、本来の現実にはヘーゲルでは、この意味でのカテゴリーの単なる自己疎外態として処理される以外にはありえなかったのである。

この事態をもつてマルクスは、ヘーゲル論理学は逆立ちしていると主張していたのである。マルクスにおいては、本来の現実を本然の場所へと移しかえ、論理学はこの現実を捉えるための狭い意味での方法の学、認識の学として位置づけ直されなければならなかったのである。

ヘーゲル論理学において逆立ちという現象が、または概念と現実との間の混乱という事態が生じてしまったことの原因をこのように押さえておいた上で、ヘーゲル論理学からは今なお学ぶべきものがあるのか否かという第一の問題の検討へと移っていきたいのである。ウェーバー自身は、ヘーゲルに神秘的な流出論が介在していることと、概念と現実との間の混乱があることとをもつて、ヘーゲル論理学を全面否定してしまっていたのであるが。

この問題を検討していくに際しては、これまでに確認してきたカテゴリーの自己展開というヘーゲルの見解そのものは、完全に否定しておくかねばならない。カテゴリーが展開されていかねばならない根拠は、既に何度も確認しておいたように、あるカテゴリーと現実との両者が一致しえないという齟齬にあり、そのことを洞察する人間の頭脳作用にこそある。従つて現実を貶値し、人間の頭脳作用をも無視したカテゴリーの自己展開といったヘーゲルの主張は、根本的に間違っているのである。ヘーゲルのこの誤謬は明白に認められた上で、なおかつ彼からは今なお学ぶべきものがあるのか否かという問題を、私は提起しているのである。この点では私は、今なおヘーゲル論理学から学ぶべきものは多々あるし、それは学ぶに値する偉大な宝庫であるとすら考えるのである。

この問題を検討していくに際しては、ヘーゲル論理学にはいかなる方法が存在しているのかという問題を考察していくのがよいと私は考える。方法という観点から眺めて、ヘーゲル論理学に存在しているそれは、もちろん第一に、萌芽からの発生的展開という方法である。ヘーゲル論理学は、建て前上はこの方法だけで貫かれているのである。しかしながら、それだけでは決してないのである。現実に対するより低い認識からより高い認識へと、認識が深化していくための方法もまた、立派に存在しているのである。

実際ヘーゲル論理学の篇別構成、第一巻Ⅱ有論、第二巻Ⅱ本質論、第三巻Ⅱ概念論は、低い認識から高いそれへと認識が深まっていくという順序で構成されているのである。従って対象を有論の立場で捉えるのか、本質論、または概念論のそれで掴まえるかでは、対象は同一であつても、それは全く異なってみえてくるのである。

それではヘーゲルが、彼が一番高い認識の見地と看做す概念論から出発するのではなく、低次の段階の有論から始めた根拠は何であるかということが問題となってくるが、概念論から開始すると、それが一番正しく、最高の認識の立場であることの証明を欠いたままの断定となってしまうからである。

そうならないためには、一番低いカテゴリーから始めてその欠陥を明らかとし、次に相対的により高次のカテゴリーをもってきて、これによって前のカテゴリーの欠陥が克服される反面、これ自体にも欠点がある、だから次のカテゴリーが要請されてくるという、『精神現象学』のヘーゲルの言葉でいえば、気の長い根気に満ちた吟味の過程が必要となってくるのである。この気の長い検討の過程の最後において概念論の見地の必要性を主張してくる以外に、それが最高の認識の段階だということを証明することはできなきのである。これが、ヘーゲルが概念論を一番最後に位置づけたことの根拠である。

以上より、この認識の深まりゆく道程をカテゴリーの自己展開の過程とは看做さずに、我々が科学的思考を行う際に用いるカテゴリーを、ヘーゲルは低いそれから高いそれへと配列して、それらを順次に検討していると考へればよいのである。実際にそうなのであつて、この考察においてヘーゲルは、それぞれのカテゴリーの有する

一定の意義と、他面において各々のそれがもっている欠陥とを明らかとし、この欠陥を克服すべく、次のカテゴリーの要請されてくることの必然性をこそ解明しているのである。

このカテゴリーの序列の配置において、彼がそれにカテゴリーの自己展開という形式を無理やりに与えるから、彼の論理学は神秘的な形式をおびてこざるをえなくなるし、詭弁的な言いくるめに満ちてもくるのである。従って自己展開というこの形式を無視してヘーゲル論理学を眺めれば、それぞれのカテゴリーの肯定的側面とともにその消極的欠陥も洞察でき、この欠点を克服すべく、次のカテゴリーが要請されてくる必然性も納得しえるのである。つまり各々のカテゴリーが認識論上においてもっている相対的意義を、ヘーゲルは明らかとしているのである。これが、ヘーゲル論理学に存在している方法の第二の側面である。

この方法の第二の観点からヘーゲルを眺めるとき、ヘーゲル論理学は、ウェーバーを研究する際にもはなはだ重要となってくるのである。それは以下の根拠によってである。ウェーバーは現実の質的個性、質的一回性、質的色あい等々と主張して、現実がもっているこの質的個性を捉えることを、彼の意味での社会科学の最高の課題と看做していた。しかしながら質というカテゴリーをしきりに強調しながらもウェーバーは、「質」というカテゴリーはどのようなものであり、事柄を質的に捉えるということはいかなることであって、それにはどのような致命的な欠陥が伴うかということ、どこにおいても一度として検討してはいないのである。「論理的な研究にとっては『自明なもの』はまったくなにも存在していない」と、自ら言明していたにもかかわらず。

ところがヘーゲルは、質と量というカテゴリーを彼の膨大な論理学において、その三分の一ものスペースを割いて徹底的に検討しているのである。この吟味の内容は驚嘆に値するものであって、「質」という一見すると自明にみえるカテゴリーがいかに複雑であり、かつ問題的なそれでもあるかということを深く教えられるのである。即ち「質」というカテゴリーは自明なそれでは決してないのである。従って質とはいかなるものであり、事柄を質的に捉えるとどのような根本的欠陥が随伴してくるかということは、ヘーゲルから学ぶ以外にはないので

ある。

また次の点からいっても、ヘーゲル論理学はウエーバー研究にとっても重要となつてこざるをえないはずなのである。ウエーバーとウエーバー研究者とにおいて、次のような表現を頻繁に見出すことができる。「一回的な特殊の現実」、「他と取りかえのきかないもの」、「無比的なもの」、「特殊なものや一回的なもの、かくしてもつばら現実的なもの」、「具体的で個性的な、それゆえ唯一無二の形態」等々がそれである。これらの用語によつてウエーバーは、個性的性格と具体性とを具備している「現実」Wirklichkeitというカテゴリーを強調しているのである。従つて現実が具有しているこの個性＝具体性を捉えることを目的とする科学は「現実科学」ということになり、ウエーバーではこの現実科学こそが、最高の科学だと看做されたのである。

以上、ウエーバーは「現実」というカテゴリーと、「現実科学」とをはだはだ強調していたのだが、ところがこの点ではヘーゲルも全く同一だったのである。彼は『法の哲学』において、「現実的なものは理性的であり、理性的なものは現実的である^②」というあまりにも有名な主張を展開して、「現実」というカテゴリーの重要性をひととき強く指摘していたのである。従つてウエーバーのいう「現実」とヘーゲルの捉えるそれとは一致するか否か、違いがあるとすればどこがいかに異なり、この差異はなぜ生じてきて、一体どちらの現実性の方が正しいのかということも、当然に問題となつてこざるをえなくなつてくるのである。

同様のことは、「具体性」というカテゴリーに対しても妥当する。ウエーバーが例えば「具体的で個性的な、それゆえ唯一無二の形態」と指摘するとき、この表現によつて彼は現実の一回生起的な質的個性を示すとともに、そのことはウエーバーでは、同時に現実の有している具体的性格ということをも意味していたのである。

ところがこの「具体性」を重視し、現実がもっている生きた生命としてのこの具体性を把握することをこそ科学の第一義的課題とした人こそ、ヘーゲルだったのである。彼は『哲学史講義』で次のように論じている。「真理が抽象的だとするとそれは真理ではない。健全なる人間性は具体的なものをめざす。……哲学は抽象的なもの

を最も嫌い、具体的なものへとかえっていくものである⁽³⁾と。

このようにウェーバーとヘーゲルとが、共に現実の有している具体性という性格を強調していたということを確認しておいた上で、にも拘わらず両者の主張している具体性の中身は、根本的に異なっているのである。それだからここでも、これらの二類の「具体性」というカテゴリーはどこがいかにより異なり、いったいどちらの立場が正しいのかという問題の、根本的な検討が迫られているのである。この意味でもヘーゲル論理学は、ウェーバー研究者にとっても、是非とも研究され、検討されねばならない対象となると私は考えるのである。

以上、ヘーゲル論理学をその方法の第二の側面から捉え直した場合、ウェーバー研究者にとってもそれは検討しなければならぬ対象となってくるということを、二、三の事例をとりあげて説明してきた。この類の事例をもっともつと列挙することはできるのだが、これ以上は行なわない。私の指摘しておきたいことは、一々のカテゴリーの意味と意義とを、ウェーバーからだけ一面的に学ぶのではなくて、吟味されたカテゴリーの宝庫でもあるヘーゲル論理学からも研究し、その上で両者の見解を真剣に比較・対照してみなければならぬということなのである。そうでなければカテゴリーの一面的な学習となり、それは誤謬に通ずる途であるかもしれないのである。

- (1) Max Weber, Roscher und Knies und die logischen Probleme der historischen Nationalökonomie, GAZWL, S. 3.
- (2) G. W. F. Hegel, Grundlinien der Philosophie des Rechts, Felix Meiner Verlag, 1955, S. 14.
- (3) G. W. F. Hegel, Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie I, Werke 18, Suhrkamp, S. 43.

九

ヘーゲル論理学に存在している第三の方法とは次のものである。そしてこの方法を洞察しておくことが、是非とも必要となってくるのである。ヘーゲルは『大論理学』で次のように論じていた。「成がそれ自身は単純な規

定であるが、それでも勿論、有と無の二規定を契機として含むものであることは単純な分析からも分かる」と。¹⁾このヘーゲルの主張が、彼が建て前上、唯一の方法と看做し、「絶対的方法」ともよんでいる発生的展開の方法に、まっこうから反しているのである。

ヘーゲルの建て前上の方法とは、カテゴリー、または概念だけを考察し、そこに内在している矛盾だけを洞察して、そこからカテゴリーの進展の方向を弁証法に導きだしてくるべきであって、現実を前もって前提し、この現実の表象に助けを求めて、カテゴリーの進展の方向を決めてはならないというものであった。ところが先の『大論理学』からの引用文は、ヘーゲルのこの建て前上の方法に根本的に反しているものであって、反しているどころか、論理学においてヘーゲルが実際に用いていた方法はどういうものであったのかということ、端的に示してくれてもいるのである。

ヘーゲルは実際には、生成流転という事態を示す「成」という現実を一方的に前提して出発し、それを分析して、その契機である有と無という要素をそこに見出しているのである。その上で抽出された要素である有と無とをそれぞれ独自に考察し、その後で今度は両契機を総合して、成というもとの現実へと立ち返っているのである。ところがヘーゲルが実際には用いているこの分析と総合という方法は、論理学では完全に隠されてしまっていて、有↓無↓成という進展はカテゴリーの弁証法的な自己展開であり、加えて現実の表象の助けに何ら頼ることのない、カテゴリーの発生的展開の過程だという具合にこぼつけられているのである。

従って実際にはここに、ヘーゲル論理学における第三の方法が存在しているのである。この方法とは、これまでの考察からも明らかのように、次のものである。まず現実を一方的に前提して出発し、この現実の諸要素を分析的に見出す、次にこれらの諸要素のそれぞれを考察してそれらに吟味を加える、続いてこれらの諸要素を総合して、もとの出発点となった現実に立ち返るといふ、分析と総合という方法がそれである。

この第三の方法の観点からヘーゲル論理学を眺めてみると、それは実際にはこの方法に基づいて構成されてい

ることがわかってくるのである。第一巻有論では、現実を質と量という要素に分析する。その上で質というカテゴリーを考察し、次に量を検討し、最後に質と量とを総合した度量というカテゴリーに立ち返って、それを吟味しているのである。この論理の進展過程が、実に合理的なそれであることは明らかであろう。現実からその構成要素を分析的に抽出してその各々に考察を加える。しかし現実はいくつかの要素の総合からなっているのだから、要素の各々を考察するだけでは、現実に対する一面的な、それゆえ抽象的な把握に留まる。そこで最後に、これらの要素を総合した次元における現実の検討へと移るのである。

これは、現実に対する分析と総合という全く合理的な方法なのであって、この側面には、神秘的要素は何も存在してはいないのである。ところが現実のヘーゲル論理学では、質↓量↓度量という進展は、各々のカテゴリーの矛盾を原動力とするカテゴリーの自己展開という形式において叙述されているのである。この点は全く評価できないのであって、この見解をそのまま受けとれば、それは文字通り神秘的な主張となってしまうざるをえないのである。従ってこの面では我々は、ヘーゲルの建て前上の論理は無視して、ヘーゲル論理学は、第三の方法として確認しておいたそれによって実際には構成されていると看做して、それを学んでいけばよいのである。

第三の方法が適用されているという点では、第二巻本質論も同じである。現実を本質と現象という二要素に分析する。その上で本質をまずもって考察し、次に現象を検討する。しかし研究の対象は、本質と現象との統一としての「現実」なのだから、本質と現象とを捉えた後で、ヘーゲルは改めて両者の統一としての「現実性」の吟味を行なっているのである。この考察の順序も、カテゴリーの自己展開という形式を無視すれば、極めて合理的なそれなのである。

第三の方法について以上に述べてきたことは、第三巻概念論に対しても妥当する。但し概念論においては、分析的に抽出された要素は「概念」と「客観」とであって、なぜこの二要素がとりだされたのかという点に関しては注意を要する。それは、ヘーゲルの真理観と関係しているのである。この場合の真理観は対象の側に求められ

るそれであつて、認識の側に要求されるものでは必ずしもない。

ヘーゲルは『小論理学』で次のように述べている。「普通われわれは、対象と表象との一致を真理と呼んでゐる。この場合、われわれは、一つの対象を前提し、そしてわれわれの表象はこの対象に適応しなければならぬのである。しかし哲学的な意味では、真理とは、これに反して、抽象的に言えば、或る内容のそれ自身との一致を意味する。したがつてこれは、先に述べたような真理の意味とは、全く違った意味である。一般的に言えば、悪いおよび真実でないとは、事物の本性あるいは概念と、事物の存在とが矛盾していることである。このような悪い事物についてもわれわれは正しい表象を作ることができが、しかしこうした表象の内容はそれ自身真実でないものである」と。

この引用文でヘーゲルは次のことがいいたのである。一方には対象があり、他方にはそれについての表象がある。そして他方の側の表象が一方の側に前提されている対象と一致したとき、つまり対象＝表象となつたときに、この表象は真理だと普通の人々は看做すが、自分はそのような真理観はとらない、あるいは、そういう真理観は決定的に不十分だと述べているのである。それではヘーゲルの真理観とはいつたいいかなるものかということ、それは「或る内容のそれ自身との一致を意味する」といわれていた。それにしても、これはどういうことなのであろうか。それはヘーゲルでは、さらに次のことを意味していたのである。

ある事柄の本性(これをヘーゲルは概念ともよぶので)、従つて概念と、その定在または存在とがずれており、乖離しているような事態もまたある。このような事柄は悪い、または真実でない事物だとヘーゲルは看做しているのである。その上で真なる事柄とは、事柄の本性、概念と、その外的形態、その定在とが一致しているような事柄、これが、そしてこれだけが真なる対象であり、真なる事柄だといつてゐるのである。そしてこのような真なる対象に対して一致した理論、これだけが真理としての理論だとヘーゲルは考えてゐるのである。

この主張はそれにしてもわかりにくいので、二、三の事例をとりあげてこの点を具体的に考えてみたい。先に

ヘーゲルの方法の一つとして、事柄を萌芽から捉える発生的把握というそれがあるといっておいたが、いまのヘーゲルの主張を考えるための事例としても、この萌芽の状態をとりあげるのが最適なのである。例えば子供をとりあげてみたい。子供は人間であり、人間の本性に概念は、理性的存在だということである。ところが子供の現実の姿、その定在は、精神的にも肉体的にも理性的存在からははるかにかけ離れた、はなはだ未熟な形態にある。つまり子供は、概念と定在とが大きく乖離しているのである。従って子供は、概念と定在との間のこの不一致を克服して、両者が合致するようになるうとする前進の衝動をもっており、実際にもこの衝動に突き動かされて子供は前進していくのである。そしてこの進展が、子供から大人への発生的展開の過程をなしているのである。

いま一つ、近代資本主義が発生したばかりの段階を、マルクスが「形式的包摂」とよんでいる事態を事例としてとりあげてみたい。この形式的包摂の段階では、資本家は確かに賃労働者を雇い入れて、彼らを生産に従事させているのである。その限りにおいてこの生産の仕方は、形式的には立派に資本主義的なのである。ところがこの段階は、資本の本性に全く合致しないのである。

資本の本性とは、科学、技術を飛躍的に発展させて生産力を巨大に進捗させる、そしてそのことにより生産を極大的に拡大する、また以上の過程に併行して世界市場も創出しつつ、利潤を極大的に獲得していくということ、これが資本の本性なのである。従って封建社会で使用されていたようなできあいの狭隘な生産手段を用いて、狭い枠内で生産する形式的包摂の段階の生産方法と資本の本性とは、この点において鋭く対立し、かつ乖離しているのである。

だからこの乖離を克服すべく資本主義経済は産業革命をひきおこして、生産力を巨大に発展させ、資本の本性に概念と、その定在とが一致するように前進していったのである。資本のこの発展段階のことをマルクスは、資本の「実質的包摂」とよんでいるのだが、それは形式と内容とが一致した、資本主義経済の概念とその定在とが一致した資本の具体的なありようなのである。そしてヘーゲルでは、概念と定在とが合致しているこのような対

象に対して、それと一致した理論が真なる理論であつたのであつて、対象一般と理論との一致ということだけでは、それは真理のための外的試金石に留まらざるをえなかつたのである。

概念論が考察の対象としている現実が、以上の説明で十分に捉え切れているとは思わなければ、ともかくもヘーゲルが、概念と定在との両側面から概念論が対象としている現実を考察していることは事実なのである。そこで彼は現実を分析し、その上でその各々の要素に考察を加えているのである。続いて両者を統合し、総合された現実を「理念」または「絶対理念」とよんで、この理念を最後に検討しているのである。

ところが実際に適用されているこの分析と統合の過程は、ヘーゲルの建て前上の方法Ⅱ発生的展開の方法に基づいて叙述されると、概念↓客観↓理念（絶対理念）という順序となり、これには加えて、カテゴリーの自己展開の過程だという神秘的な意味も付与されてくるのである。この建て前上のヘーゲルの論理を文字通りに受け入れれば、事柄の本性としての概念がまず最初はどこかにあつて、そこから事柄の客観的姿態が、そして現実としての事柄が導きだされてくる、概念から自然を含む現実が発生してくるといふ、極めて神秘的で倒錯した主張が出現してくることになるのである。そしてヘーゲルのこの側面を捉えて、ウエーバーとウエーバー研究者とは、ヘーゲルの形而上学的流出論として一斉に批判していたのである。

この批判自体はもちろん正しいのだが、しかしそのような批判をヘーゲルに対して行なうならば、何も概念論だけに限定して批判を加えるのではなくて、有論に対しても、本質論に対しても、同一の批判を適用すべきだったのである。有論も本質論も概念論と全く同様に、実際にヘーゲルが使用している分析的方法に根本的に反して、カテゴリーの自己展開という、倒錯した神秘的な形式で貫かれているからである。

このカテゴリーの自己展開というヘーゲルの建て前上の方法に対する批判を徹底させて彼の論理学全体に加えるならば、それはすなわち、マルクスがヘーゲルに対してなしていた批判そのものとなるのである。つまりヘーゲルでは、カテゴリーないし思惟過程が現実であり、運動している生きた主体的自体であると看做され、我々に

とつて現実であるものは、この思惟過程の無力な自己疎外態に貶められるという逆立ちした事態が生じるにいたっているというのが、マルクスのヘーゲル批判の主旨であった。

だから現実を本来の場へと位置づけ直し、論理学をも、この現実を捉えるための狭義の方法の学、認識の学として捉え直し、このようにしてヘーゲル論理学の逆立ちした事態を慎重に逆転させば、その限りでのヘーゲル論理学からは、今なお学ぶべきものは沢山あり、それは文字通り偉大な学問上の宝庫なのである。従つてヘーゲル論理学のごく一部分だけを捉えて、または安易にも他人の描いたヘーゲル像だけに依拠して、それを流出論として、または概念と現実との間の関係が曇らされていると一方的に規定して、それだけでヘーゲル論理学を全面否定するというのは、刮目するまでに偉大な学問上の宝庫であるヘーゲル論理学からは、そして巨匠ヘーゲルのその他の著作からも、何も得るものはないということになってしまうのである。これが、ウェーバーのヘーゲルに対する態度であり、無批判的に彼に追随するウェーバー研究者たちが、大なり小なり示すそれでもあったのである。

- (1) G. W. F. Hegel, *Wissenschaft der Logik I*, Werke 5, Suhrkamp, S. 32.
- (2) G. W. F. Hegel, *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften I*, Werke in zwanzig Bänden 8, Suhrkamp Verlag, S. 86.

十

ヘーゲル論理学は流出論であり、また「汎論理主義」でもあつて、そのために概念と現実との間の正しい関係を把握することが混乱させられたというウェーバーのヘーゲル批判を手掛かりとして、その批判の特質と妥当性を検討してきた。

この考察は当初の予定にはるかに反して、多岐多様な側面へと拡大していき、ウェーバーのヘーゲル批判の妥

当性だけを検討するという最初の意図から大きく離れて、ヘーゲル論理学の秘密を解くという企てそのものへと移動してもいった。この検討のなかから、ヘーゲルにはいまなお学ぶべきものが沢山あることを確認することもでき、ヘーゲルをも研究対象としている私にとっては嬉しかった。ウエーバーのヘーゲル批判がなかったら、私は晦渋で超難解なヘーゲル論理学に深くわけ入っていくという苦痛に満ちた試みを敢えて行なうことは絶対になかったのであって、この点では、ウエーバーのヘーゲル批判に対しては私は心から感謝するものである。それは実に貴重な、感謝に値する問題提起であったのである。

ウエーバーが尋常一様ならざるヘーゲル嫌いであったことは、ホーニヒスハイムの次の一文から知ることができる。「他方、ウエーバーがつねに自分に対立すると考えていたのはヘーゲルであった。当時の私自身の基本的立場は多分に汎論理主義的であった。もちろん私はこのような立場からウエーバー夫婦に対していくつかの意見を述べた。それに対してマリアンネからは『救世的若者』という言葉を送ったが、マックス・ウエーバーからは『ヘーゲルよりももっと悪い』と言われ、また『すべてが全く宙に浮いている』と言われた¹⁾がそれである。ウエーバーにとってヘーゲルとは、「すべてが全く宙に浮いている」ような、空理・空論家でしかなかったのだらう。しかしながらヘーゲルは他方では、冷徹なまでのリアリストでもあったのであり、そのことは既に確認しておいた。

それにしても、ウエーバーのヘーゲル批判とは一体何であったのであろうか。第一の流出論批判という点に関しては、確かにそうした側面がヘーゲルにあることは認めるが、しかしそれは、流出論と看做された論理の底にある、ヘーゲルの真意を全面的に捉えそこなった批判であった。第二の「汎論理主義」と、そのための概念と現実との関係の混乱という批判に関しては、ウエーバーは言葉の上でだけそう言及しているにすぎないのであって、この点については何ひとつとして具体的な説明と解明とを行なうてはいなかったのである。だからヘーゲルにおける「汎論理主義」の内実と、それによってどのようなようにして、またなにゆえに概念と現実との間の関係が倒

錯するにいたったのかというこの問題とは、ウェーバーに代わって、不本意ながら私自身が全面的に明らかとし、
 解明していく以外にはなかったのである。

私はその際、ヘーゲルの「汎論理主義」を厳しく批判しておいたのだが、それだけに私はこの批判の反面において、一定の後悔の念を強く抱かざるをえなかったのである。カテゴリー、または一般概念は自己展開していくというヘーゲルの主張は容認することができないが、一般概念は固定化されてはならず、展開されて自己を特殊化していき、この展開過程の全体において自己を具体化していかねばならないというこのヘーゲルの指摘そのものは正しいのである。

理論の出発点となる端初、または原理は、有機的総体という現実の一定部分、一モメントに対応しているにすぎないのだから、一面的事態を捉えたにすぎず、それゆえ抽象的な端初、または原理は展開されて、この有機的総体性という事態に照応するように具体化されていかねばならないのである。端初となる原理は固定されてはならず、展開されねばならないということを強調してヘーゲルは、「哲学の所謂根本命題または原理は、たと真であつても、ただ根本命題ないし原理としてあるにすぎないかぎり、すでにただそれだけの理由で偽でもあるということである」と論じていたのである。このようにヘーゲルの神秘的側面は、敬意を表すべきその偉大な洞察と表裏一体となつて存在しているのであつて、「汎論理主義」ということで私はその欠陥だけを一面的に批判したために、強い悔いの念が残つたのである。

このように見てくると、ウェーバーのヘーゲル批判とは、二次的文献に依拠しただけの、ヘーゲルの真意を何ひとつとして理解することのできていないものであり、それはヘーゲルの戯画化であり、カリカチュアでしかないと断定する以外にはなくなつてくるのである。従つて佐久間氏が「ウェーバーが、方法論的研究に立ち向かつたとき、いかにヘーゲルに慎重な配慮を配っていたかを物語る」と指摘するとき、私は佐久間氏がそう主張することの根拠が全く理解できないのである。ヘーゲル自身の著作を実際に読み、そこにヘーゲルの真意を捉えよう

とする努力をなら示してはいないウエーバーに、ヘーゲルに対する慎重な配慮なるものを期待することは、そもそも不可能なことだからである。

ウエーバーのこのような外在的なヘーゲル批判に接するとき、理論研究を行なうに際してシユムペーターがとった態度を、私は強く想起せざるをえないのである。シユムペーターは『理論経済学の本質と主要内容』と『資本主義・社会主義・民主主義』において、要旨次のような主張を行なっている。彼は、リカードウ、マルクスなどを研究するときには、自己の見解を完全に放棄して、著者の立場になりきって全てを理解しようと試み、一見すると奇妙な見解も、彼らがなぜそう主張せざるをえなかったのかということ、著者の立場になりきって解明することに努めるといふのである。この点が理解できたら今度は、著者の理論のどこは評価できて、他のどこはそうではないかということ、を自己の責任において判断していくのだが、この判断は、著者の立場になりきって彼の理論の全てを理解できていけば、おのずと可能となってくるといふのである。加えてこのような研究態度は、理論研究に従事する者のとるべき当然の態度だとも指摘してくるのである。

その上でシユムペーターは『理論経済学の本質と主要内容』を「すべてを理解することはすべてを許すことである」という格言でもって始めると共に、続けて「克服をでなく理解を、批判をではなく習得を、単なる是認もしくは否認をではなく、分析と各命題における正しいものの抽出とを、われわれは望むものである」と言明して⁴いたのである。即ち他者の批判と否定の前に、他者の真意を深く理解し、そこに正しいものが有るのか否かを吟味せねばならないと言っているのである。私はシユムペーターのこの指摘に深い感銘を受け、以後、理論研究に従事するに際しては、彼の立場を自己のそれとして堅持しようと努めている。

ウエーバー自身はシユムペーターとは反対に、「『すべてを理解すること』は『すべてをゆるすこと』を意味するものではない」と論じていたのだが、ウエーバーはヘーゲル⁵的見地を許さず、それを破壊し去ってしまう前に、ヘーゲルのすべてを理解するどころか、ヘーゲルの真意を何ひとつとして洞察してはいなかったのである。

ヘーゲル論理学の秘密を解く鍵は、以下の二点を正確に押さえておくことである。その第一は、ヘーゲルは弁証法的教条主義者であったのであって、方法としては、萌芽からの発生的展開という弁証法的方法しか認めなかったということである。その第二は、対象に対する認識の深まりゆく過程にこの方法を適用し、この過程にカテゴリーの自己展開という形式を付与し、その結果、客観的弁証法と認識の学としての主観的弁証法を混同していたということである。

この二点からヘーゲル論理学を眺めてみると、そこに存在している神秘的な主張の大半について、なぜヘーゲルがそういう類の不可解な見解を展開せねばならなかったのかということも理解できてくるのである。それはひたすらでたらめなだけの主張であるのではなくて、ヘーゲルのとった立場が、論理必然的にそうさせているのである。この点が理解できれば、その限りにおいてヘーゲルの主張も許されるのである。但しシユムペーターと同様に、その側面を私は自己の立場とはせずに、無視し、放棄するという判断を私の責任において行なうだけのことである。

ウェーバーのヘーゲル批判とは、およそこうした内在的な批判では全くなかったのである。この点では、ウェーバー研究者も同一である。彼らはウェーバーの問題提起を受けて、その上でウェーバーを離れて、ヘーゲルを直接に検討してみるという試みは何ら行なつてはならず、ひたすらウェーバーの主張している範囲内に留まり続けているのであるから、彼らがヘーゲルに対して、ウェーバーと同一の外在的立場とならざるをえないのは当然のことなのである。

この外在的な批判という点は、ウェーバーの次の指摘と、この指摘に対するウェーバー研究者の解釈とにおいて、如実に、かつ端的に現れてくるのである。ウェーバーは「ロツシャーとクニース」において、「ロツシャーは、窮極のところフイヒテの或る種の思考過程に淵源する、このような観念領域の内部に終始とどまっていた」と論じていたのである。ウェーバーのこの主張と、それに対するウェーバー研究者の解釈とが問題なのである。

偉大な哲学革命を惹起したドイツ観念論哲学が凱旋行進したその労多き道程と、この革命を担った巨星たちの問題意識とに鑑みると、私はウエーバーのこの一文には我慢ができないのである。

周知のようにカント哲学には、認識不能な「物自体」が残った。そうであるならば、従来の思惟規定に変更を加えるか、新たなカテゴリーを創造して、認識不能な物自体の克服に努めるべきであったのだが、この点の努力は何も行わず、カテゴリーを従来のままに放置していたのがカント哲学の特徴であり、その欠陥であったのである。そしてカントのこの側面における怠慢を、ヘーゲルは厳しく批判するのである。

そこでフイヒテは、思惟規定を低いそれから高いそれへと自我から演繹することを試み、そのことによって従来の思惟規定を改造しようと企図したのである。その場合、この演繹の原動力となるものは、自我の外部に存在し、そこから自我に対して加えられる「無限の衝撃」であったのだが、この無限の衝撃とは一体なものであるかは誰にもわからず、この点がフイヒテにおける「物自体」として残ったのである。

従ってこの認識不能な「無限の衝撃」と、それに依拠した思惟規定の演繹ではなく、そういうものに頼ることのない思惟規定の導出と、そのことによるカテゴリーの改造と新たなその創出、そしてそれらの全てによってカントにおける認識不能な物自体を抜本的に克服するということが、これがヘーゲルに付与された課題だったのである。ヘーゲルが思惟の弁証法的な自己展開にあればどこだわった根拠は、ここにこそある。

ところが偉大なドイツ観念論哲学がたどったこの道程と、それを担った巨匠たちが抱いた独自の問題意識を何ひとつとして理解することもなしにウエーバーは、先の引用文において、ヘーゲルに特有に見出されると彼が看做す流出論は、フイヒテに淵源するということだけを一方的に捉えてくるのである。この指摘を受けてウエーバー研究者も、カントに始まり、フイヒテ、シェリングを経てヘーゲルの壮大な「総体性の論理学」へといたる、偉大なドイツ観念論哲学のたどった道程の問題意識など一顧だにすることなく、ウエーバーの主張をオーム返しに繰り返して、流出論はフイヒテに淵源すると、安直にも指摘するだけなのである。

ここには、ウェーバーに対する絶大な学問的信頼をみてとることができるのだが、こうした態度は学問の進展を阻害することはあっても、前進させることは決してないであろう。そしてこうしたウェーバー研究者の無批判的な態度のいきついた頂点が、まともな論証は何も伴わず、ひたすらウェーバーの権威に依拠しただけの、谷嶋喬四郎氏の「神と被造物との絶対的断絶、価値と事実との完全な分断、という徹底した二分法的発想は、かつてヘーゲルが築き上げた弁証法的全体化の世界を完膚ないまでに破壊し去った。思想上におけるウェーバーの功績は、一にかかってここにあるとともに、これまたウェーバーのエートスの必然的帰結であったといえよう」という、大袈裟なだけで無内容な主張だったのである。

このような主張が一方に存在している以上、私自身はヘーゲル論理学に神秘的な側面が無数に存在していることを十二分に自覚してはいるが、ウェーバーとウェーバー研究者とによって戯画化されたヘーゲル像と、ヘーゲル批判とに耐えることができず、ウェーバーのヘーゲル批判を、感謝に値する有難い問題提起として受けとめて、巨星ヘーゲルに対する公平な評価を敢えて行なわざるをえなかったのである。

- (1) P・ホーニヒスハイム、『マックス・ウェーバーの思い出』、大林信治訳、みすず書房、二九〜三〇頁。
- (2) G. W. F. Hegel, *Phänomenologie des Geistes*, Verlag von Felix Meiner, S. 23.
- (3) 佐久間孝正、『ウェーバーとマルクス』、世界書院、五〇頁。
- (4) シュムペーター、『理論経済学の本質と主要内容』上、岩波文庫、七頁。
- (5) Max Weber, *Der Sinn der Wertfreiheit der soziologischen und ökonomischen Wissenschaften*, GAZWL, S. 503.
- (6) Max Weber, *Roscher und Krieser und die logischen Probleme der historischen Nationalökonomie*, GAZWL, S. 10.
- (7) Georg Lukács, *Geschichte und Klassenbewußtsein*, Luchterhand, 1970, S. 257.
- (8) 谷嶋喬四郎、『弁証法の社会思想史的考察』、東京大学出版会、三七七頁。

(二〇〇二年九月十三日受理)